

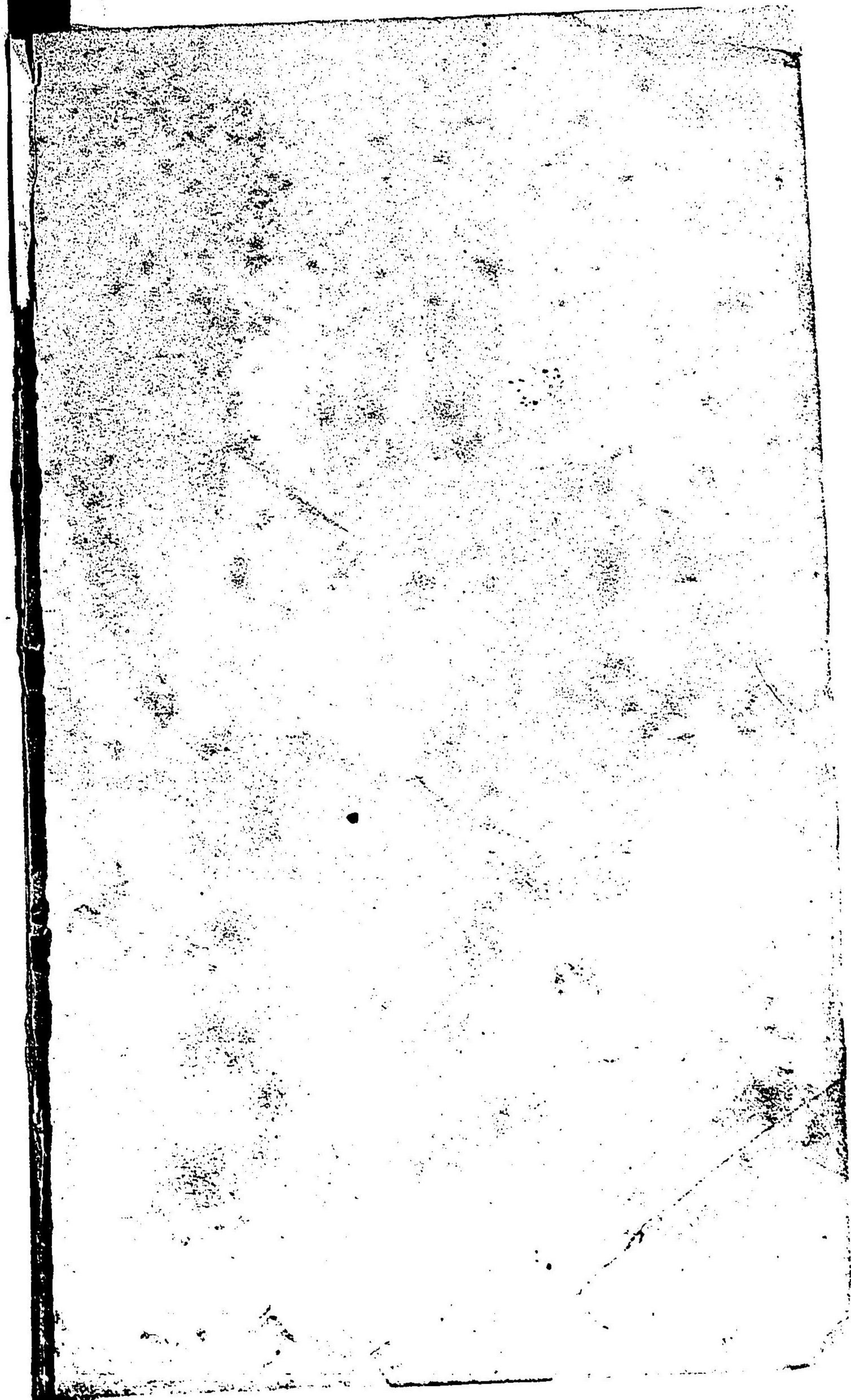
特 8

163

加賀漢勤

一月







久松桃太郎

加賀久松桃太郎

四代目石川一口講演
丸山平次郎速記

第一回

エー本日より開講いたします。久松桃太郎と題しまし
 て、これは加賀騒動にございます。目下の石川縣金澤は徳川家
 御繁盛の時分は御國司頭で何事も將軍家が御相談のあつた位
 な御大家なる事は、一口が申上ぐるを待たずして、諸君のよ
 御承知の事でございます。廣御ければ御話も多く、それに應じ
 て御講も大勢御在で遊ばしますから、兎角騒動の絶間のない御
 家でございまして、既に五代宰相吉徳公の頃は、大槻とい
 へる大悪人が出でました。この者は漸く足輕大槻長次兵衛の伴

長玄と申して、見習坊主に上つて居つた者でございませうが、恐
れ多くも大守の御裏方と不義を致し、如何に長けて居りますか
ら、遂に犀川の柳原といへる處に屋敷を賜り、五千七拾五石と
まで立身を致しました、その大槻盛んの時分は、國許に於て梅鉢
より五三の柄の紋の方が端が利いたといふ位で、この事は同業
者は一尙申しません、先般東京から久々歸阪を致しました、
只今では故人になりましたが、大松島屋我輩、その合弟我輩の
両儀が、加賀縣邊を角の廻場であつた時、大槻の紋所が知
れぬに依つて、如何いふ紋であらうかと、一口方へ尋ねに見
ました、チャア一口閉口いたしました、分りません、此處を請
釋師の技倆を見する所なりと、様々の物を圖べて考へました、
さうも分りません、不圖思出しましたのは、彼の享保時代に流
行ました歌で「火事場廻りは二ツに切れる、これを三ツに切つ

たなら、それを五三の柄の定紋といふとを彼の地で落首に貼
つた者があつたといふので、小さな子供までが、流行歌の如く
に口吟んだとでありまして、今に喉に残りある事とございませ
う、これ正しく大槻は五三の柄の定紋ならんと、直さまこの事を小
松島屋へ認め、送りしました、ところが我輩は中々熱心な仁で
ございませうから、加賀へ手紙をして彼方の或士族さんから調べ
て貰ひました返事が参りました、其處で一口から送りしました手
紙と、その面とを合して開封をしますれば、屋敷の地名から
知行の高紋所までがキチンと符合しましたから、大きに女も喜
んで呉れました、石川さんは熱心な人間だといふので、深くそ
の後は交際をするやうになり、合に一口も心安く致して居りま
すが、大槻の紋に夜の目も寝ないで熱心に調べをしたといふ一
口も、餘り賢くない性質なんでございませうが、加賀縣邊といふ

久松桃太郎

ものは、なか／＼大變な逢ひを往昔から申してございまして
この大概は彼れは内藏助と申しますが然うではございません
内藏面でございます、内藏面が謀反に依つて、加州の羊公を三
代まで害し、四代目の主君を以て相殺させましたが、加賀は奴
の殿様で騒動が始まつて坊主で納まつたといふ事を申します、
福を被せて將軍家へ御目通をさせて、それで大國の主は直し納
めたのでございませぬ、この時には前田土佐守といへる忠義な家
老が一身粉になるまでも晝夜の別なく御家の事に勞して始り
て主家の安堵を見た事にございませぬ、この主君を松平加賀守五
郎公と仰せられ、從四位少將で在らっしゃいました、ところが
三人の御子かございまして、御長男は加州は御代々犬千代丸と
御命けになるが例でございませぬ、御次男を發之助松と申し、御
三男を道之助松と仰せられました、ところが四男に桃太郎とい

久松桃太郎

ふ御子がございまして、これは侍女に御手が付きました、主公
御不在中に誕生を致されました、是に於て、お局方の嫉妬が強
く、殊に發之助君の母に當るお静の方といへるは、並勝れたる
嫉妬家でございませぬ、然るにこの方に暫く仕へて居りましたる
お高といへる女の腹より桃太郎は出産いたしましたものでございま
す、既にお静の方は嫉妬の餘り高女をば雪見の姿の時に殺害に
まで及ばうと致した位で、金谷の御殿の廣庭の松の大木に用
上げて、雪衣にまで致しました、はや一命も絶えなんとする位
の所を、足輕久松百々平なる者が助けて、笠前田甫といふ處
に住して居りまする力士の藤懸儀大夫と申す者とは、酸兄弟の
縁を結んで居りまする間柄ゆゑ、人知れずこの宅に高女を隠匿
ひ置き、此處にて介抱を致し、安産をさせましたのでございま
す、これは表向きに御披露の出来ませぬ御公達、依つて百々平

の願字を訓を取って、桃太郎と命けました、ところが重頼公には、追々御老年にもならせられ、三人まで御子孫も御有りな
さることゆゑ、家督をば定めんければならず、道回江戸表参勤
の御禮に参るまでのうちに、相當なるところの定めを付けて置
かうといふので、老臣を御集めになりまして、御相談の上、長
男犬千代丸事家督に直し、松平筑前守重教と名乗らしめ、次男
養之助君を以て、分家富山の養子と定め差遣さるゝ事になりま
した、三男道之助君を以て、かねて御約束もこれある事ゆゑ、
因州邑美郡鳥取の御城主松平相模守の御家へ御養子に御遣しに
なりました、恠く國許の定めを着けて御置きに相成つて、直ら
に御前は右桃太郎並びにその母たる高女を伴れて、江戸表へ御
出ましに相成りました、これ國許に一大騒動の起る筈でござい
ます、と言ふのは、養之助君の母に當りまするお静の方と云ふ

るは、自分の腹より出産ありし養之助君を以て加州の相模人に
直したいといふ事を、強硬しい女の丁儀から、底根思詰めて居
りました、長男犬千代殿は兎角御多病所らにて、動も致すと御
病氣で寝所に臥して居られるやうな事でもございませう、依つて家
督は我腹を痛めたる養之助君を以て麻したいと思詰めて居りま
したるところ、道回虚弱にても多病にても長男を以て家督に直
すが願常なりと、主君の御一言は竊の一聲、誰が彼れ此れと陰
を容する譯にも相成りませず、忠臣者は御名君の處置したまふ
ところ、何れ御見込あつて遊ばす御事、如何ぞこれを拒むべき
皆恐悦の思ひを致しました、只不漸を拍いて居るのは、お静の
方その父の木田半之助、これは漸くにして高岡町敷の中といへ
る處にて、食餘は三百石の凡役の武士でございませう、如何な事
を思ひましたとて、一百の寮寮も出来る身分の者ではございませ

久松桃太郎

せん、只腹で無念殘念ぐらゐな事を思ふより仕方のない事でも
さいます、とてころがこのお静の姉といへるは、加州の老臣一万
三千石を領しまして、屋敷は大尻谷と申して、金澤御城の大手
前にて立派な屋敷に居られます、太田筑後守といへる大夫の奥
方になつて居ります、そこでお静の方は我姉婿たる筑後と密か
に強通を致し、無念の心を打明けて、色情の道から味方に引入
れんとなし、また筑後も首尾よく這回の御相續の筑前殿を失ひ
いま富山に御養子と定まつたる御次男養之助君を以て加州の家
に直しなば、己れの爲めに甥といひ、その母たる静の部屋とは
不義を致して居ります、百万石の加州の政治を、己が掌中
に握らんといふ野心増長より、同役老職の土井伊豫守といへる
一万石取りの者を味方に引入れました、この仁は重役にて堂々
たる身分といへど、常に荒き事を好みまして、文には左まで明

久松桃太郎

かならざれども、武にかけては他くまでも達者なもののゆゑ、勇
に誇つて人なき如く、常々慢心をする位わな仁でございます、
申し悪いが餘り伶俐といふ方ではない、智慧は足らいでも慾は
知つて居ますから、首尾よく謀反の成就する曉は、本多、長の
如き重役も眼下に見下せるといふ心から、遂に一味となつて、
内々味方を集め、筑前守重教殿を失はんと心に委ねました、
それは國許の騷動、此方は江戸表本郷五丁目の御上屋敷に御着
に相成つたる少将重靖殿、右桃太郎を儀太夫、百々平の兩名に
傳をば仰せ聞けられ、晝夜文武の道に心を用ひさせ、只成長を
のみ待つて御在でなさいます、桃樹は二葉より香しの例ひ、
實のなる樹は花から知れるとやら十八歳にして斯かる北國の御
大國を吾れ一人の所存より御家の安泰をはかり、悪人を片端上
り退け、立所に内亂を鎮め、將軍家の御耳にも觸れず治めやう

久松桃太郎

といふ、古今天晴れの名君と御成りなさる君でございますから
一口などの成長とは違うたものでございます、一度聞いて二度
は聞はず、一を聞いて萬を知るの力あり、一口粟は實を置いて
受けるのが分らぬといふ賢だから、チロイと似て居ても行ふ所
は大變な違ひ、既に九歳の年齢までは御長屋にのみ御育て申し
御殿へはツイぞ伺候をさせた事はございませぬ、何思ひけん九
歳の年齢に、上からの御沙汰に依つて、久松、藤懸の兩名は御
供をして、主君の御前へ罷出でました、この時はじめて重頼公
は「桃や汝は誰れの子ぢや」と御尋ねになりました、すると臆
する氣色なく桃太郎は加賀從四位の少將前田重頼公の第四男、
久松桃太郎にござります」と御答へなすつた、主君は歡喜の餘
り笑みしたまひ「主公誰が左様な事を其方に傳へた」と御聞きに
なりませると桃太郎も私に傳へる者はござりませぬが、平素

十

久松桃太郎

の行ひ皆の者が私を敬ひます所に依つて、加賀家の末子と心得
ました、主君は膝を打られたまひ「主公よ、コロヤ儀太夫、百
々平、襦袢のうちより育上げ呉れたる其方共過分に存するぞよ
この者こそ實に加州の礎とも思ふぞよ、何分忘りなく文武の道
をば仕込んで呉れるやう」と御言葉が下りました、依つて儀太
夫、百々平は、些かも油断なく江戸表に於て豊田喜兵衛といへ
る有名の學者の許に二人は附添うて通ひ、日夜普通の學問は更
なり天文の奥義までも御稽古を御させ申し、武藝は南部の浪人
南部誠剛の門人として槍劍柔術は素より弓術馬術火術に至るま
で御學ばせ申し、十四歳の年の春には、兩師から断られました
豊ねが悪くつて落第する子供は今世には澤山ありませぬが、教へ
る先生がその術に盡きて断るといふは、先づ古今未曾有の御仁
でございませう、それはさて指さ茲に國許謀反人の輩は、晝夜

十一

の別ちなく、家督の君を失はんとにのみ心を委ねて居ります。が、兎角邪魔になるは深見小路といへる處にて屋敷を設け、御食餘は八千石、當時學問所の奉行をば勤め居られます。深見將監と申される御仁、至つて潔白なる實にして、この仁の風として思はかりも曲つた事があれば、自分の腹に納め置き、後日これを持出して、衆人の意見を聞き、喋々述立てるなどいふ考への付かない潔白な方でありますから、最う思つたればその場で直に所思をば述べて仕舞ひ、悪いものは悪い、好いものは好いと、その座を去らず物事を行ふといふ、餘り潔白過ぎるといふと、身の毒を惹出す事が出来るといふは此處でございませう。諸事藝道にも拙なからざる方ゆゑ、この仁を以て罪に落し、役目をば退かせやうと、悪漢無頼の曲者共は、眼を注げて居ります。するなれど、百奉行ひの上にて非を打つ所もなく、役目に取つ

て租相なければ、奈何とも致す工夫がつきませぬ。然るにこの深見將監の御息女に初糸と申して當年十八歳、譬ふるに物なき天然の美人、百万石の御家中は更なり城下町々農家に至るまでも、恐らく初糸の上に出づべき婦人はまたとあるまじ、實に加能越三國の美婦であらうといふ位、評判高き方でございませぬ。この息女に眼を注げて、何卒いたして我妻に申受けたいと、朝夕心を痛めて居りますのは、これは謀反人の荷擔人の合弟辨之助と申す者で、これまで江戸表染井の加州家中屋敷の役高は百石その實無縁で勘定方を勤めて居ました。堀山流の武藝に秀で、學問も相當に出来、總て武士一と通りは出来、仁にございませぬ。兄の數馬は忠臣無二なる實の仁、弟辨之助は實に白悪と申して、面を見れば如何なる優しき者ならん。加賀業

久松桃太郎

平といはれる位々の美々しきものとはいへ、その心中の奸悪な
る事は譬ふるに物なき程の人物、これは當時謀反人に荷槍をし
てより、家督の君筑前殿に、程よく謀反人の周旋を以て、五百
石とまで立身を致し、御側役に出で、萬事心の儘に暮し居り
まする、斯るがゆゑに、深見の息女初糸を何卒我妻に申受けたし
要りたしと、晝夜忘るゝ暇もなく、様々と工夫に及んで、身を
焦がし心を盛すといへど、前申します通り、將監ゆゑ、イヤ
ハヤ石部金吉金兜鐵砲丸の坐禪豆といふ質ですから、迎も手の
着けやうもございませぬ、これは他手を待たんよりも、寧ろ自
から直接の談判こそ好かれと考へましたところより、深見の思
取へ罷越しまして、世間話より段々と縁談の事に持込んで、迂
遠く娶ひたい旨を申入れますると、ヤツコイけんもはるゝの疾
撥、深見將監は「一身不肖なれども八千石の食糧を戴き、尾州以

久松桃太郎

來の家柄にして、御先祖六千代丸利家公に従ひ、桶狭間の合戦
にもその功あり、それより數代連綿として、荷くも今は加賀家
の老職の端を汚すこの將監、雖にも勝る御身が御姫致なれど、
その心の汚なき事は、我淨玻璃の鏡にかけて寫し見れば、イヤ
ハヤ譬ふるに物なき其許、決して娘はへゝ遣さぬ、姫致を好み
知行の多きを喜ぶ者にあらず、假令足輕、賤しき者にて、此
方の鑿に叶ひし者ならば兎も角、殊にこの將監の一人、姫
子を迎へ相續をさゝんければ相成らざる娘、なれど縁あれば決
して遣さぬとは申さぬが、御身には如何なる方の懸掛りなりと
も、將た身分のあるべき方の媒介ありといへど、娘初糸は遣し
申さぬ、再び斯様な事を聞く耳持たぬ、疾く歸らッしやれ」と
事もなげに撥付けられました、流石悪人の辨之助も、致方がご
さいませんから、無念骨髄に徹しながらも、憎々として自分の

久松桃天郎

ぬ事と思へば思ふはと無念でござる左京殿
上げ、
のといふ事は、逆も及ばぬと、また彼の仁に暴言を吐いてか
ららばとて、相手にすへさ仁ならず、重役なれば無禮なる事は
素より爲すこと能はず辨之然すれば拙者は返報の致しやうがご
さらぬではないか左京其處でござるぢや、御身氣が付きませぬ
か辨之、どうも拙者には考へが付きませぬ左京ハ、ハ、ハ、イヤ
然らば手前が御傳授申さう、彼れが奉行を勤める學校へ放火を
爲たまへ、就いてはその騒動に紛れ、學校の寶藏に秘め置かれ
たる、加州の御先祖利家公自から御認めに相成りし稱快問古戦
記の書類、その他故太閤より拜領の千代鶴則兼が贈へた産刀が
ござる、この二品を云々いたし、その論になつたる時は、新く
新様々々、公事場奉行は土井伊豫守、其許自由目通の出

久松桃太郎

来る仁、夜中に参つて新様々々に依頼を致されたれば、無禮深
見は罪に落ち、八千石の知行を取上げられ、配所の月を眺めさ
せ、書しみる娘の秘糸、其處で貴殿が新く、新様に取計ひ
手活の花と眺められたら、それこそ朝飯前の茶漬でござる辨之、
なれどその學校へ此方は手入の致方がござらぬが左京これは日
頃の好道で以て、この左京が八百屋お七と出掛け申さん辨之、
れでは何分や願ひ申す左京承知仕つた、是にて左京は別れて立
歸りました、さてその夜の子刻過ぎと思しき頃には、俄かに非
常の物音「火事だ、學校が火事だ、主君の御學問所より火が
出でた」どの騒ぎ、仕済ましたりと辨之助、急きも騒ぎもせず
故と揚羽の蝶の紋の付いたる提燈を持たせ、火事發束を身に纏
ひ、馬に打乗り兩三名の家來を引伴れ、餘々火事場へ衝着け参
りますれば、はや八方より火消の者共、その他火事掛りの役人

久松桃太郎

方、水よ龍吐水よと騒いで居ります。深見將監殿は學校奉行の儀にございますれば、取る物も取取す臣等を引伴れ、彼の手を防ぎこの手に水をと指圖をして居られます。中々なる混然素より主君筑前守直敷公は、捨て難き事ゆゑ、御名代として前田駿河守を以て、直さま現場へ馳着けさせ、他目も觸らず出火をば防がし居られたるとにございます。曉方近くに相方つて、漸くのとに銃火を致しましてございます。が色々學校に備付けの品々を取調べになりますと、此は如何に、寶藏に秘め置いたる二品の寶が知れませんが、大變と追々重役方は出張に相成り、この事を言出し、等閑ならぬ事なれば、一ト先づ引取り城内廣間に於て評定にかゝらんと申出しました。この時公事場奉行土井伊豫守「先づ兎に角深見將監殿屋敷へ向け、大變大切な品物だけは、運びたる由を承れば、備しやそのうちに殺れる

久松桃太郎

るやも圓り舞し、兎に角將監殿屋敷へ一度罷越し、立合ひの上取調べ見む」ともつて、四五名の老職深見の屋敷へ罷越し、色々昨夜の品物等を相取めましたるどころ、此は抑も如何に、深見の屋敷の庭前に、何となく土の掘返して小しく小高く相成つて居る所が目に着きました。ハテ怪しの事なりと、早速土井は指圖を致し、二三の僮僕に吩咐けて、その處を探し見ますと箱のうちに入れてございます。は、薙刀の身と書類でございます。これは怪しならぬ深見殿、これは如何なる事でござるか」と言はれて深見は驚ばかりも身に覺ゆのなさと、殊に潔白の將監、覺ゆのあらう道理なく、只面目なげに思案に暮れて居ります。兎に角この場を被れ此れ申すも異なる事なれば、一ト先づ城内へ同道を致し、大廣間に於て各々方の御意見も承り、評定にかゝるが第一ならんと、申出でられる仁もあれば、深見同道

久松桃太郎

の上に城内へ麗越し、大廣間に於て加州の重役、凡そ三十名ばかり車坐となつて、土井伊彌守は公事場奉行の儀にございますれば、一端立つて深見へ向けて如何なる所以かと、この事を聞かれました、將監は素より覺はなき趣を答へます、すると老職玉井市正、山崎庄兵衛、前田駿河守、不破彦三などの方々、互ひに目と目を見合ひ、物言ひたげに致して居られますが、御身分があると、妄りに口を發しません、不破彦三は彦三一番丁に屋敷を賜り、加州藩にては漸くこの頃大目附を勤めるはな職分のお方で、知行は四千石ほどの方ではございましたが、加賀の御城下には彦三何町丁といふ町名を残した事にございます、これは何故かと申しますれば、御先祖前田利家公越前國大野郡府中、目下の武府でございます、此處に居られました時分不破、金森、黒丸、これ等は皆前田と同等の柴田の配下にして

久松桃太郎

言は、朋友の圓柄でございました、然るに利家公だけは、殿下秀吉公の御徳は目出度く、遂に徳川の世と相成つても、國守の頭とまでなられました加賀家でございますから、そこで不破は前田家の家臣となり、永く利家公以來事へて居られますから知行は前に申し上げました通りでも、家柄は恰かも徳川家に於ける大久保に均しき仁でございます、殊にこの頃の彦三殿は、交も曲つた事は嫌ひな方で、至つて潔白な仁で、少しも待て暫しがおとさないませんから、彦三伊豫殿、御貴殿の言はるゝところ、甚だ彦三は聞き悪し、何か貴殿の御説では、右の二品は將監殿が盗み隠しでも致されたやうに聞かれますが、實といふものは、我手に觸るゝこと能はず、自由にならぬものだから、欲しいといふ氣も出るもの、即ち深見殿は學校奉行、實藏に秘め置くといへど、桶狭間古戦記の書類を出して見やうと思へば、自由に

久松桃太郎

見らるゝところの職に在る仁、また薙刀とて、太平の御代に、
 假令則兼が心を籠めて鍛へたる刀物にもせよ、如何に切味よき
 品にも致せ、用もなきに薙刀を持つて振廻し歩けるものでな
 ければ、これを自分か庭内に隠して紛失をさせ自分の手に留り
 置いたとて、敢て寶といふものでもござるまい、寶は持つ
 べき仁が持つから寶で、名もなき者が持つ時には、干將莫邪の
 劍も持つに依るといふ、往昔の劍今の薙刀、身分不相應な者が
 持つば、何にもならざるもの、豊や左様な愚かな事をば致され
 る將監殿にはこれあるまいと存する、多分これは將監殿に私の
 遺恨あるべき者が、出火に事寄せ致した事かと彦三は存せられ
 る、方々の御意見如何に、この時玉井市正、前田駿河、今井田
 内記、山崎庄兵衛の如き御仁は「如何にも不破殿の殿、御有
 理、でござる、その邊に相違あるまいと吾々も存する事でござる

久松桃太郎

伊豫アイヤ、何さま伊豫とても三股の御説は御有りに承る
去りながら將監殿は八千石の食膳を辱なうせられ、老職の列に
居られる御身分、殊に學校奉行も勤むる重役の仁が、遺恨を受
けるの、怒みを受けると言はれるところは、矢張り私の計ひ
があるかと心得られる、すると不破は口を發き、彦三智者の一失
恐者の一得、百万のもの百万ながら彼の人は善きものと言ふ者
は恐らくあるまじ、人々それく、十人寄れば十腹のためし、な
れど十人が七八までの人が潔白と言へば、潔白ではござらぬか
貴所は多数の説を捨て、少論を御取り召さるか、それでは其許
大切なる公事場の奉行、一万石の食膳を辱なう致される老職の
身分でおありなさに少とこの不破に於てはその意を得ざる事
と心得ます、伊豫アイヤ大きに何うも痛入つたるその言葉、何
さま將監殿は御迷惑でござる、なれどもこれをこの儘捨て置く

久松桃太郎

時に於ては、今彼の戒めにも相成らぬことゆゑ、氣の毒ながら
將監殿は身に降りかゝる災難ではござらうなれど、相成なる所
の處置を受けられんに於ては、今日の評定この儘に流す辭には
相成り難く存する言はれて見れば、枉げてこれを何う斯うと
申す譯にもなり兼ねます、矢張り學校奉行の役を勤めて居る
人だから、その責任は自分も受けなければならぬ事でございます
す、將監殿は只一言も申しやうがございませぬ、また他の老臣
もこれを責任のないものと言ふ譯にも参りませぬから、それ限
りでこの日の評定は分れどなりましたが、如何なる處置をする
であらうと、皆注目を致して居ります、倘し深見に切腹でも
附けるやうな事あらば、その時は吾々の考へもありと、老臣
一同の人々、言はず語らず目と目を見合ひ居りましたが、土井
も馬鹿ではございませぬ、謀反の棟梁太田筑後の片鱗、また筑

久松桃太郎

後守は只の一言も申しませぬ、これは俗にいふ好事師と申して
悪い事は他の者に言はせ、己れは高處で見物をして、旨い事は
一人でするといふ、諸君、随分只今でも斯ういふ人は往々あり
ますから、油断は出来ません、ところで日ならず深見將監は、
加州御領分のうち、能登の島の路といへる處がございます、こ
れは金澤御城下より北東に當り、二十有餘里を去る能登の國に
あります、この島へ流刑といふ事に極まりました、この罪人
を流しまするに、私の島といふものは、大名では三國守を除く
の外は他にございませぬ、加賀は島路、薩摩は屋久島、種ヶ
島、仙臺は彼の只今で申せば北海道小樽、札幌などといふ、彼
處は舊仙臺の罪人を流しました處でございませぬが、その他は細
川、黒田の如き國守といへば、島流刑は公儀に願ひ、公儀の手
で島へやつたものでございませぬ、然るに茲に傷しいは深見將監

久松桃太郎

殿でございませす、遂に右の島の路へ流刑に相成りました、御家
内の芳野、娘初糸、用人の富澤清太夫、給人の岩谷久蔵、この
四名は、深見の一族にて三百石を蔵さする深見重三郎といへ
る御仁の許へ御預けとなり、その他の者は皆御暇といふ事に定
まりました、是に於て全く八千石は上へ御取上げと相成りまし
た、實に哀れな有様でございませす、茲に取分け哀れなのは、重
三郎方に預けになつたる將監の妻芳野、娘の初糸、只ウツ
と暮すのみ、涙に暮れて居りましたが、何う致すにも斯う致す
にも、女の事で致方なく、一定めて良人將監殿、心淋しう暮した
まはん、切めて其方と妾とが島の路へ罷越して、お側にあつて
給仕なりとも致しなば、少しはお心の安まる事もこれあらんが
この事あらはに語りなば、逆も重三郎殿が許される間にはある
まい、依つて密かに當屋敷を抜出で、御城下より五里を距る

久松桃太郎

七尾の街道筋、高松濱といへる處に、確か只今馬負を活計とな
し、梶之助といへる者が居る筈、これは元家に仕へた中間にて
至つて實体な者ゆゑ、これを訪ねて参らうと親子は密かに飲
合ひ、遂に夜中支度を致して、重三郎の屋敷を抜出でられまし
た、ところが一寸出るにも徒歩といふ事はなく、悪籠でばかり
助けられて居る親子連れ、二里か三里の道來れば、はや足が痛
んで思ふに任せず、彼方に休み此方に憩ひ、やうくにして五
里の道を日暮方に参りました、尤もこの道は白妙道にして、今
濱、高松、木津の往來と申して、馬の脊をば煩はせませす處で
五層倍も六層倍も道の遅速が違ひますから、馴れた人は皆馬を
雇ひます、下駄を穿けば齒を踏込んで歩けず、草鞋を穿けば
小砂利が這入つて足の裏を痛め、實に運び悪い處でございませ
す、はや入相の鐘を聞き、道往く人に尋ねて見れば「此處は高松濱

でござります」どのとに、壁て唯ある家に来り「この近傍に梶之助といへる馬負を致し居る者はなきや」と尋ねれば「この向ふの繁茂の許に燈火のさす宅が、馬負梶之助の宅でござりますと、教へて呉れましたから、禮を述べ、痛む足を堪へながら、トホくとして兩人はやつて参ります、壁て戸外に参りますると、漏れ聞ゆる鐘の音チン、南無阿彌陀佛々々々々々々、五六人の聲が聞えて居ります芳野誰ぞ居らぬか、頼みませうぞ、〇ハイ」と言ひながら出て参つたは、梶之助の後妻お政といへる者でござりますお政ハイ、誰方さまでござりますか芳野妾は加賀國金澤の藩中深見將監が妻芳野、これは娘の初糸梶之助が宅に居るなら、會はしてたも、お政これは、誰て良人に承つて承知いたして居ります、よくことお出で遊ばしました、先づ何卒、願苦しき茅屋なれど、お上り下されませうやう

芳野佛事でも勤めて居るのかや、お政イ、エ奥さま、貴婦のお訪ね下さりました良人の梶之助は、不幸に致しまして、終に亡くなりなりました、今日が初七日に當りますので、在下の方が打寄つて、只今お勤めをして下されました事でござります芳野エ、トッ……と驚きました、如何いたせば好からうやら、頼みの綱も切れ果て、岸に離れし捨小舟はや梶之助は現世を去つたかど、思へば尙更駒通り、ワツとばかりに歎かれましたお政、ア、奥さま、何のやうな事かは存じませぬ、鬼に角お上り下さりませ、願苦しい足をお容れ遊ばす所もござりませぬが、及ばずながらこの政が、お力となつてお話も承りませうから、するど来合はして居りました隣家の人々「お政どのや、何うやらお容様が、お見ねなされたとゆゑ、用事があれば知らせなさい何時なりとも来ますとや、ア奥さまお願ひを、御縁容とお

久松桃太郎

話しなされませ」と挨拶忽々逃げるが如く歸り行きましたは里
 人の常、行儀作法を知りません、田舎育ちの武骨者、跡でお政
 は芳野どのにむかひお政さて奥さま、兼ねくの話で承つて居
 りました、斯かる淋しき旅のお姿、如何あそばしましてござ
 ります」と聞ひかけられて奥方芳野、半ば話をするうちに、胸
 に急き来る血の涙、眞人が成行きの概略を、語了つて懐に挿
 親子二人は平伏しましたお政ア、御有理でござります、お察み
 遊ばすにも絹夜具のうち、チヨツと出るにも乗物にお召し遊ば
 す貴婦方、道三丁もお徒足でお歩きなさるは稀れなと、城下離
 れて五里の道、歩みも馴れぬ旅の空、白砂道のこの街道、御復
 しうございます、女でこそあれこの政が、現世を去りし亡夫に
 代り、力の續くだけの事は必らず働さ、貴婦さま方のお供を申
 し、如何やうとも致し、能登の七尾の府中濱まで参り、島路

久松桃太郎

へ渡る便船を設け、乾度御主人様にお會はせ申上げませうはと
 に、お心安く思召しませ」と忠實しくもお政の言葉に、芳野親
 子は氣を落着かせ「何分どもに宜しう頼む」と非常に喜びまし
 た、芳野どのの横に向き、帯の匱より金包を取り出し、金子三兩
 を白紙に包みまして、芳野此金は些少であるなれど、亡夫親之助
 の佛前へ、線香なりとも求めて立てよやつてたも」と差出しま
 した、そこは何うも御身分のある方は格別でございませ、今日
 であれば随分三圓ぐらゐな香燭を供へる方は、幾人様もおあり
 なさるでござりませうが、百有餘年以前の三兩は、大分香燭に
 は大した金です、お政定めて亡夫が草葉の影より厚く喜びますと
 ござりませう、ドレ、ナヤ、と佛前へ供へませう」とその
 儘お政はお燈明を上げ、位牌が祭つてございます前へ持つて参
 り、上げるやうに見せ、右の紙包みの中より、何程かの金を振

出し、兩人に見せぬやう快裡に入れてお政、奥さま、チロツと一
服召喚つて下さりませ、妾は忘れて居りました事がござります
近所の方を頼んで使ひに行つて貰ひますから」と言ひつゝ戸外
へ顔出ししました、待てば程なく米肴様々の物を求めて参りまし
て芳野、コレ、必らずかまうたもるなや、お政、イエ何う致しま
して貴婦、参らうと思つて居りました折柄のと、只今御飯を差
上げまするから」と支度をして居りますうちに、隣家の者が
膳部などそば持つて来て呉れましたから、これを借受け、早々
二人の方へお政、サア、進げます物でもござりませぬが、お心
置きなう召喚つて下さりませ」と差出ししました、其處は乗馬の
飼下しだから、貧乏の有様は少とも分りません、給仕をしなけ
れば喚ばぬと覺悟を極めて居りますし、何處の宅にも錢や米
はあゝものど心得て居られますから、別に氣兼ねもせず、少し

器具が氣に遣らぬ位なもので、御飯を召喚されました、どころ
がヤレ〜と思召した精か、その晩から不圖奥さまは御病氣と
なり、サア身体が痛出して、翌くる朝となりますと、一寸も
動かせせん、そこでお政は非常に困りました。「お醫者様にでも
願ひませうか」と尋ねますれば芳野「これは妾の持病ゆゑ、必ら
ず心配してたもるナ、病氣はこれ〜、何處か藥を賣る宅があれ
ば、容体を言うて藥を求めて来てたも」と懐中から筒巻を出し
その中より金を出してお政に渡しました「難儀な事にお出遣ひ
なされても、御身分のある方の奥さまは、また格別なもの、譯
山な金子を所持してお在でなさる」と思ひながら、お政は金子を
受取つて、これから半里はきとさいます木津といふ處に倉川白
庵といふ醫師がございます、これは町醫ではございませぬが、中
々この界限では有名な仁で、此處へ藥を求めに参り、容体を言

ッて調合をして貰ひ、薬を求めて参つて奥さまに煎じて差上げました、よく合ひまするか、大きに奥さまも喜びました、慇懃く三日目々々に薬を求めに参る事になりましたが、芳野これでは迎も急には妾が全快は覺束ない、初糸や、其方は先に心に懸る島路とやらへ渡つて、父上に面會をなし、妾の事をばお話申してたも、母は全快次第後より参るはとに、豈は成るべく道を少なう歩いて、宿元へ早く泊るやうにして、島路へ行つたも、お政ア、勿体至極もござりません、姫さま、妾がお供を申上げたら、些かも安する事はござりませぬ、御病氣の奥さまを捨て置き、人を頼んで置きましたは、何程か心懸り、姫さまをこの街道筋は決して御心配なざる事はござりませぬ、が、只案じまするは白砂道、お足運が少とお困りでござりませう、能登の七尾とお尋ね遊ばし、府中濱の上田屋右衛門といふ旅宿へ

御着きになりまして、其處の亭主にお頼み遊ばせ、然すれば確か兎ヶ崎の大口といふ處へ船をばやつて呉れますから、それからお上り遊ばすと、島六といふ者がござりますさうで、それは島守の頭の名ださうでござります、これをお頼み遊ばして、阿父上様にお會ひ遊ばせ、初糸妾はお手許にあつて介抱も致したけれど、父上様に一日も早うお會ひ申したし、心には懸れど、それでは母上の事を呉れ、頼みますぞや」と、歩みも剛れぬ旅をば、十八歳の初糸の、四五丁は政に送られ、遂に能登の七尾をさして立出でました、お話かはつてお政は、跡で忠實しくも相變らず奥さまの病氣の介抱を致し居ります、その翌日は薬の切目、また奥方は胴巻より金を出してお政に渡しなされる、政は受取つて、木津の倉川で薬を求めんと、高松濱を背後になし、七八丁参る背後の方より、馬子歌を誦ひながら、やッ

て参りました一人の馬子「オ、母者人、母者人、チロイと待た
んかエ、お政、誰れぢやエ」と回首て顔を見てお政「オ、菜飯の善吉
か善吉、コレ、馬鹿にして呉れるなエ、菜飯を喫ったのが手柄ぢ
やアないせ、お前が乃公を捨て置いて、掘之助の女房になつた
ばかりで、母に別れて是非もなく、五十八日の間といふものは
驚の餌のやうな物を喫つてゐたので菜飯の善吉と、それで姓名
が付いたのだが、餘り聞かれて自慢の話ぢやない、が、實は母
者人、お前に頼みがある、聞いて下さい、お政「エ、頼みといふは
如何いふ話、善吉「ア、チロイと聞いて下さい、斯ういふ話だが、
一服して話させよう。

第三回

お政「善吉、何の用である、善吉「イヤ、母者人、乃公もナ、斯うや

つて借馬アして働いて居ては食ふだけが幸う、知つての通り
賃の安いこの街道、荷を積んで馬が痛むし、實に困つて居る
が、何うかして五兩だけ金を心配して呉れる事は出来まいか
お政「お前も知つての通り、掘之助殿がこの中死なれて續く物入
女の手ツ、妾に心配せよと言つたので、出来さうな事は無い
ではないか、善吉「そりやア母者人、乃公も泣く子も目をおけとい
ふお前の説言は承知して居るが、誰れ頼まうといふ人もなし、
お前に頼むより他にしやうがない、何卒工夫は付かぬか」と言
はれて見れば焼野の雉子、其處は親の情でございませ、この善
吉といふは、お政の前の配偶今濃の辰蔵といふもの、女房であ
つた時分に出来た子でございませ、その辰蔵が歿した後、善
吉は最う年頃になり、馬負も出来るやうになつて居ますから、
人に預けて馬負をさせ、自分も掘之助の方へ再縁を致しました

久松桃天郎

ところが不幸にしてまた梶之助にも死別れた今日の仕宜併し
我子に違ひはございません「話を聞けば可憐さう、脊中に膿は
替へられぬから、御心配の上にお願ひ申すも恐れ入る
が、仔細を言ッて頼めば、豈や否とは言うて下さるまいし、
いのではない、持ッてお在でなさるのだから、これは一ッお願
ひ申して見やう」と今善吉に話を聞いて不圖心が付きましたか
らお政「ア宛に角明日の朝小早う来て見るがよい善吉それでは
母者人、必らず頼んで置くぞ」と喜び勇んで善吉は空馬を牽
いて母より先へ行過ぎました、此方は薬を求めて宅に戻りお政
奥さま、大きに遅うなりました、ア、薬をば煎じますから
と盛て薬を煎じ、奥さまの前へ持ッて参りましたお政召上りま
せ」と出しますると芳野「ア、お世話ぢやのウ」言ひながら芳野
どのば右の薬を服みましたが、暫時するとまた差込んで来たも

久松桃太郎

のと見れて、苦悶みなさる様子、見るに見兼ねてお政は「奥さ
ま、差込みまするか芳野「ア、また差込んで来たわいのウお政」
「レ、それでは妾がお探り申しませう」と背後へ廻ッて春中を
探り、グイツと無下した途端に、探れば觸る彼の胴巻、お政は
心中「ア、これがあッたらナ」と思ひまするが、何うも貸して
呉れといふ事は、口まで出ても外へは出せません、言へるもの
ではございませぬ、持ッて居るのは見れてゐても、申し悪いの
はこれでございませぬ、其處等になると、一口共の社會は強いの
のでございませぬ、無いと言ッても心配させなくツちやア置きま
せん、だから始終席元と不赦を生ずる事が度々ございませぬ、貧
の盗みに懸の懸、お政は道ならぬとは思ひましたか、許して下
さりませと、子に惹かざるゝ親心、思はず發する悪心より、有
合ふ手拭咽喉にかけ「御免あそばせ」と、女ながら馬負の一

久松桃太郎

ツもしやうといふ者でございます、小方がございますから、グ
イツと咽喉にかけて絞りますれば、何かは以て堪るべき、この
中より病氣で疲れ果て、些か位は手に覚むもありますのであ
りませうが、病疲れて居るところへ、油断は充分ございます
「ア、一ツ」と言ふのが此世の別れ、取なや其處へ舞りました
お政、お許しなされて下さりませ、子が可愛さの出来心、主殺し
の罪は、冥途でお詫言を致します、追付け妾もお跡より参り
ますから」と言ひつゝお政は手早く懐裡の胸巻を抜き取り、未だ
体温の傳つて居るを、心わるゝ推戴き、その倒死骸は寢床の
うちに寝かし置き、障子一重外に出で、圍爐裏の側に來り
お政、彼の善吉めが詰らぬ事を言ひ居つたゆゑ、斯ういふ道
ならぬ事をして、膝ぞや亡夫の楯之助殿が、草葉の蔭から怨ん
でお在でなされう、許して下され楯之助殿、義理に絡んだ現世

久松桃太郎

の情けなさ、善吉めが不慮と思つての出来心」と狼藉ちつゝ
「斯ういふ時には酒でも飲んで氣を晴らさんもの」と朝求めて
置いた焼肴を串の儘圍爐裏にて炙り、酒の爛を致して居りま
る、はやそのうちに薄暮の鐘がウーンと聞えます、折しも裏
の戸口より、ノソリと足音をさせ、お政ツてなア宅に居
るかエお政、難方、茅屋なれども妾の宅、用事があるなら表から
遣入つて來るのが當前、聞き馴れぬその聲、隣家の方とも思
へず、〇喧しい、恐圖々々云ふなエ、お政は回首り見れば、手
拭でヒヨットコ被り、大小刀横たへ裾端折り、洗足のまゝノソ
くど上ツて参りました一人の武士、〇ヤイコリヤお政、汝の
宅にやア加賀の重役深見將監の娘初糸といへる者が隠匿ひある
事を承知をしてやつて來た、乃公に渡せお政エ、グ、馬鹿な事
を言ひなされるナ、盗みをなされたと言ふではなし、人を殺害た

と言ふではなし、逃足りして隠れるか方ではなし、隠匿ふとは
 何事、主従の好誼を以て訪ねてお出でになつたなれど、その姫
 さまは疾に能登の七尾へお出でなされ、妾が宅には居られはし
 ない、〇言くな、吐すす、突留めて出て来た郷藏様だ、愚圖々
 を吐しやア數ない命がなくなるぞお政エ、ッ猪牙才な、女でこ
 そあれこのお政、貴様等のやうな瘦武士の一人や二人脅かしに
 来たッて、物の數とも思ふやうなものではない、入らぬ頭を叩
 いて却ッて怪我をするなよ」と言ふより早く起つよと見ゆしが
 流槽にある出齒庵丁、取る手遅しと駈来り、武士を目掛け、矢
 庭に突掛ッて参りましたから「汝れ猪牙才な女郎め」と振向き
 さまに振くより早く、一ト太刀ザク一斬付けました、悲しい
 事には女の腕、何うする事も相成らず、受損じて斬込まれ「ア
 、一ッ」と言ふなり踏躓きながら、無念の切齒をなし、尙も飛

びかムッて突かうとするを、返す刀で胸元を、グヤとばかりに
 突立てられ、その儘其處へ打倒れ、哀れや絆は絶れました、〇
 能ア見やアがれ、要らざる事をして自業自得に往生しやアがッ
 た、ア、幸ひ咽喉も渴いて居るし、緩容一杯飲らうかエ」と
 圍爐裏の側に座り込み、ホチゝ酒を飲み始めましたが、奥室
 もその儘見すにして、芳野の死んだ事は素より知らず、大膽不
 敵の曲者、空腹へ二三合立て付けて引掛けましたから、思はず
 睡氣が催して参り、その儘其處へ倒れたなり、グツとばかりに
 一ト寝入り、折柄腕の鐘聲の聞ゆる頃、池ア喫ッてやッて参ッ
 た茶飯の善吉、表の戸をドンク叩きまして善吉母者人々々
 と呼はりまする、この聲に驚いて目を覺したる右の涙入、南無
 三と起上り、身邊にありし胴巻を、手早く懷裡へ振込んで、腰
 物をば提げたる儘、庭に下りながら腰に穿し、表の戸を開け、

出でんとするを善吉は「母者人、何と云うて呉れ、物を言はねねと分らぬがナ」トロイッて眺めて見ますれば、此は抑も如何に、母にはあらで怪しの武士善吉ヤア汝ア泥棒か曲者か」と飛びかゝらうとするを、手早く体を引外し、ヤツと言ふなり善吉を、向ふの方へ突飛ばせば、尻居に撞と打倒れ善吉ヤア乃公を突きやアがッたナ……ハア今の奴は……分ッた、さては母者人め、棍之助さんが死んだ後で、怪しい彼んな者を引張込み楽しんでゐる居たのか、何たる乃公の阿母は情けない仁だらう、こりやア乃公が這入ッて思ふ存分に言ひまくらにやアならぬわい」と周章で宅内に入り、その儘臺所へ参りますれば、行當る母の死骸善吉何だ、こんな毒暗い處に寝て居るせ、母者人か、ア、また飲倒して酔潰て仕舞ッたナ、暗處なれば血汐と

も知れず善吉こりや何ぢやエ、何だか可怪なものが付いて居るぞ、エ、如何した事だらう」と言ひながら、取合の障子を開け奥室へ来ればまた一人善吉エ、御免なさいまし、何處の方かは知りませんが……言ひながら思はずも芳野の顔に手を當て見ればこれまた總身水の如く善吉エ、ツ何ぢやエ、ア、心の悪い「その儘奥の雨戸を蹴放し、明りで手摺を眺めて見れば、手摺一面の血汐、回首り見れば身分のある女の死骸善吉ヤツこりやア何ぢやエ、ねらい處へヤツて来たぞ」此方へ来れば阿母は般血に染みたるその有様善吉ア、失策た、さては今のは泥棒か乃公の母者人を殺したか、こりやアねらい事になッて来た、何うしたら好からう、エ、ア、こりやアア迷惑だわい」と馬騷々々いたして居ります、折柄戸外の方に聲あッて「少と物を尋ねる、高松濱の棍之助殿の宅は此方かな」と二度聲をかけた

した善吉「何ぢヤエ、何奴ぢや」と言ひつゝ、戸外をロイヤと
 眺むれば、はや明け切つて充分に明るくなつて居ります、大小
 刀指た立派な旅装束の武士善吉「ヤ、汝れは今逃げた泥棒だ、
 姿を變へて様子を探りに来やアがツたか、コリヤ、今演かけて
 木津、高松、三ヶ所にては人に知られた馬方の善吉様だ、今度
 は滅多に逃しやアせぬぞ」と矢庭に飛出し「この盗人めが」と
 飛びかゝらんとする奴を、体を躲して利腕を引捉へ、武士「傍若無
 人の曲者、無禮をするか」と言ひつゝ肩にかけたる岩石落し、
 ドンとばかりに投出され善吉「どうなとさらせ、金の無心は茶々
 無茶苦、一度はならで二度までも、振られるなら可いが乃公は
 投られ、何うしやアがるか汝れア、武士「ハ、合點の行かぬと」
 とツカ／＼と宅内に入り、様子を見れば此は如何に、臺所に
 は一人の死人、此は何事と奥室へ參れば、哀れや其處には奥方

芳野との無残の最期、武士「ヤ、ア、これは何うした事か、ム、
 ヲ……」と何思ひはん膝を打ち、周章て戸外へ飛出し、手取早く
 善吉を取押へ、武士「コリヤ何うしたのか、汝れ有体に申さずば、
 縛上げて辛き目に遣はすぞ善吉ア、痛い、痛い、そんな無茶さ
 れちやア堪らぬ、實の所は斯う、斯ういふ解」と昨日母に頼
 みし一條より、今朝自分が參つて、斯く、云々との有様を物
 語を致し置した、武士「失策だ、身は深見將監殿が家臣富澤清太夫
 といへる者である、その曲者と申すのは、今の先この驛の飯屋
 に於て食事をして出でんとするところを、圖らず此方の面を
 見て、顔色を變じて逃出せしが、彼奴確か島田辨之助の許に食
 客いたす浪人者岩田郷藏といへる奴、さては島田に頼まれて、
 初糸ののば泰ひに來せたナ、なれど初糸の影の見ぬぬは
 必定何かの行違ひならん、併しての儘奥方の死骸は捨て置く

に相成らず、只今汝の話を知れば、多分親子の情に惹かされ、
奥方はこれなる婦人が被殺したとより思ひやうがない、また初
糸どのがお在でなさらぬのは、お逃げなされたものか、或は何
處へかへお出でなされたものか、何さま生顔と死顔とは相格が
變るものなれど、斯う見るところが、餘程御衰弱の体にて、御
病氣でいもつたものと思はれる、何は然れ、この儘捨て置く
時にも相成らぬ、コリヤ、この近傍に寺院はないか、善吉へエ
この山際にござります、清太、然らば汝は許して得させるから、こ
の死骸を負うて寺へ案内を致せ、善吉、こりやアいどい事が始ま
た、錢にはならず早桶の代りはせにやならず、清太、彼れ此れ言は
すに負うて行け、善吉、して私の母者人の死骸はこりや何うなりま
す、清太、爾が母は母で埋葬を致すやう、此方が正塚捨ては置か
ぬから、兎に角この死骸を負うて寺へ参れ、善吉へエ、左様な

らお供を致します」と妙な面鏡をして菜飯の善吉は芳野との
死骸をば負ひ、これより寺へ参りましたが、悪て和尚に合うて
萬事を頼み、「何れとも時節来らば捨て置く氣遣はござらぬから
身は云々いたする者にて、これなる方は新しく、斯様のお方ゆ
ゑ、何分宜しくお頼み申すと、幾らかの金子を出して事を委し
く依頼に及びました、素より佛を扱ふて吊ひを致すが寺の本分
殊に由ある加州の藩中、捨て置き難き事といひ、また清太夫の
姿を見れば、中々偽言飾りを申す仁とも見えず、菜飯の善吉は
和尚も馴染、話を聞けば氣の毒の在宜、依つて快よく引受けま
して、埋葬する事となりました、是にて清太夫は懐中より金子十
兩を取出し、清太、善吉とやら、此金を汝に取らすはどに、其方
の入用の五兩を引き、殘金の五兩で母の死骸を取片付けてやれ
善吉へエ、一時は怖いと思ひましたが、流石は御家老深見將監

のだ、何の事か一向清太夫には分りませぬ。清太、他愛もない事を申すナ、左様な色情の道に心を寄する此方ならず、併し何うにも心懸りの事であるが、如何いふ婦人ぢや、彦右、イヤハハ、清太、エ、イヤ、疑ひ深い奴ぢやナ、然らば此方から人相を言つて見やうか、彦右、ヘ、エ、通てられるなら通て、御覽めそばせ、清太、年齢は十八九歳、顔は面丸、色はクツキ、白い、目の張は並より大きい方にて、極く美やかな婦人であらう、彦右、何の彼んのつて、貴郎どうも馬鹿になすつて、然う言やア悪い所は一ツもありやア致しませぬ、素より私が美しい斯ういふを方だと概略話をしたものだから、付込んでそんな事を仰しやります、清太、此疑ひ深い奴ぢやナ、然らば亭主、其方に眼みがあるが、彦右、ヘ、エ、清太、その婦人に、俯しや貴様は深見初糸さとのとは仰せられぬかと、お尋ね申して呉れ、彦右、ヘ、エ、ヘ、エ、清太、然うぢやと

仰せられたら、富澤清太夫といへる者が参つたと、斯う言うて見て呉れ、彦右、何だか可怪な話でござりますね、イヤ、兎に角一應申上げて見ませう」とこれから二階の座敷へ参り、彦右、ヘ、エ、お嬢さま、御退屈でござりませう、女、コソ亭主や、未だ島の路への船は便がないかや、彦右、ヘ、エ、如才なう手数は致して居りますと、時にお嬢さま、エ、俯しや貴様は深見初糸さまとは申しませぬか、初糸、ヤ、ツ、妾が實名を何うして其方が……彦右、ヤ、いよく、稀代な話になつた、富澤清太夫といふ者を御存じでござりまするか、初糸、ナ、富澤とや、その富澤が其方の方へ俯し尋ねて参つたら、少とも早う通してたも、彦右、いよく、堪らぬこれは……左様ならばその方を此處へお通し申しませうか、初糸、少とも早う通してたも、そこで亭主、彦右、衛門は、周章で二階より降りて参り、彦右、旦那、初糸さまに相違ござりませぬ、清太、左様か」と

會はして貰ひたいと言入れますと、島六茶ッて様子を見「何
 さま身分あるべき將監殿なら、この位おな人の會ひに来るは理
 りなり」と思ひました。○併しこの島の法でござりますから
 腰物はお預り申します。清太素より其許に確かにお預け申す」と
 大小刀を渡しました。尤も彦右衛門の指圖でございますから、
 竹の筒に米又は梅乾見布といふやうな類を入れて持ッて参りま
 した。竹は何のやうな竹でも力さへあれば提げて行けば可いの
 でございます。總て竹の筒に入れたものでなければ、運ぶ事は
 出来ないとしてございます。そこで食物は皆竹の筒へ入れて持
 ヲて参ります。初糸ののは初糸のだけ、力量のあらん限
 持ッて参ります。清太夫は男だけで多分の用意を致しました。
 これを携へ島六の案名に従ひまして、將監の居ります處へや
 ヲて参りました。見れば竹の柱に蓋の屋根、苔むす庵に火を焚

いて、取巻ながらにはんやりと、頭髪は背後に撫下し、腰帯は
 延放題に延ばし、以前の様は露ばかりもございませぬ。將監オ、
 清太夫か清太御主人様。將監初糸か初糸父上様。渡接しいお姿に
 かなり遊ばしたナ。右と左の手に籠り、ハッとはかりに泣入る
 風情、側に見て居る島六も、共に哀れと貰ひ泣き、この時將監
 身をふるはせ、將監配所で月を見る度毎、故郷の事を忘れ兼ね、
 枕に就けば涙れよと、涙跡さまよふ千島の聲と、俊寛僧都が
 まれしも、理りなるか無理ならず、能登の島には鬼あらず、鬼
 は本國金澤にあり初糸イヤ御有理でござります。清太お道理で
 ござります。ツツとはかりに泣入る主従、折柄一人ツツと泣
 り。△島六。○何だ。△また誰方か將監様に會ひに参られまし
 たぞ。○エ、ツ、今日は如何なる日か、よく會ひに来るとだ。
 と泣きながら立ッて行きました。暫時経つてまた一人、竹の筒

をば七八本擧げながら、やうて参る者がございます。○「將監殿、この仁も貴下に會ひに参りましたぞ。將監、オウ、左様か、ア、今日は如何なる吉日ぞ、娘といひ清太夫といひ、オ、汝や岩谷久藏ではないか、久藏へエ、オ、清太夫殿、こりやア初糸さまでござりまするか、新様な事とは露知らず、お心にお懸りなされるはお道理なれど、お女中のお身の上、豈も此處までとは、思ひませなんだ、久藏めもお跡を慕ひ参りまして、幸ひにこの路でお目にかゝるとは、何より御無事でお喜ばしい事に存じます。今日はお見舞かたぐ、罷出でましてござります、卒さ召喚られませ」と竹の筒を將監の前へ差出しました。將監、イヤ、これは過分に心得る、睡さないぞ。この折、清太夫さん、清太へい、○「一寸島六が會ひたいと申して居りますから、清太ア、左様か、御主人、御免あそばしませ」とそのまゝ清太夫はその座を立って

次へ退りました。跡に久藏は「御主人、彼の清太夫は忠臣者ぢやと思召しますか、將監、將監は誰れが憎い彼れが可愛いの別け隔てはない、我身に從ふ者共は皆可愛く、また忠義な者である事は、今更言ふに及ばぬ、久藏して御主人、あなたの奥方芳野さまは、高松濱にて最期の始末、清太夫の手にかゝつた事は、御承知はござりませぬか、初糸、コソ、久藏、お前は、何といふ事をば阿父上に讒言を致しまするか、彼の清太夫に限つて、そのやうな事をする者でない、母の最期は清太夫に殘らず、妾も聞いてお知をして居ります、その次第は、新様々々で」と言ひにかゝらんとしまするを、久藏、イヤ、サ、娘さま、貴殿は清太夫にかねて悪想を致され居ります、左様な事を仰せあれど、決して、これには確かな事を認めて参りましたのぢや、將監、イヤ、コソ、餘計な事を申ふな、家老の末席を汚すべきこの將監ですら、心にも

なき這回の不幸、思ひも依らぬこの災難、奥の最期は是非もな
い、彼れ此れ無益な闘争を致す、後日白日青天を見る時節あ
らば分ると、左右するうち清太夫兩手を拱んで思案顔、茫然と
元の座に來り差控へました將監、久藤、久藤、ハ、ハ、ハ、將監、其方はよく
見事に参つて呉れた、これなる初糸を伴つて國許へ歸り、重三
郎の許へ預け置き呉れよ、清太夫、汝は島に殘つて、我給仕を
頼むぞ、兩人委細承知いたしました、初糸、妾も父上のお側に残り、
御用を達したうござります、將監、イヤ島に女は無益の至り、疾く
立歸れ、エ、ハ、ハ、歸れと申すのに、と叱付けられ是非もなく、初糸
ハ、イ、……と泣く、久藤に引立てられ久藤、ハ、ハ、ハ、経さま、毎
主人様のお言葉もあり、チヤ、ハ、ハ、とお出で遊ばしませ、と言はれ
て初糸も、心は此處に残れども、看す、不忠の久藤に、引立
てられて、ハ、ハ、ハ、と歩む娘の初糸が哀れな姿は言葉に盡せず、

越て久藤は島六に會ひ、預け置いたる腰物を受取り、初糸もま
た護身刀を帯の間にさし、待たせて置いた船に打乗り、然らば
これより府中へと、船頭は腰を解き、船を出し、兜ヶ崎の大
口へ廻つて、向ふの府中へさして傳ぎ始めました、跡に残りし
清太夫は主人にむかひ、清太、御主人様、將監、何ぞや、清太、看す、
の島田が計略、遂に眼の暗んだ久藤、彼奴一眼の不具なる分際
に、この島の路へよくも島田に頼まれて、主を討りに來せを
た、御主人にはこの事は……、將監、汝が言ふまでもなく、この
將監も承知いたす、清太夫、可愛の娘を敵の手に渡して伴れさ
せ行く親の心のうちを察して呉りやれ、加賀の先願は面相道長
公、天濞官が加護ましまして、この將監が無實なるを憐れみた
まふ事あらば、豈か無は敵の手にて、慰まるゝ事のあるべき、
尚しや島田が手に渡り、自然肌身を汚す事もこれあらば、この

久松桃太郎

身ばかりか主家の大事、武選の末と断念る、善悪邪正の卜占に娘を渡したこの將監、爾や何と思ふか清太夫、清太ア、恐れ入るましてござりまする」將監は「ソウ懐しの娘よ」と岩に渡つて此方を見れば、見渡す向ふは九十九崎、この島の路の名所は、一ト目に見ゆる沖の風景、初糸、岩谷兩名が、乗つたる船は島の路を、廻つて彼方に進む折柄、今まで晴れし長閑な空が、忽ち掻陰り、懸墨を流せし如く相成り俄かの大風雨、駭駭が駆けるか白馬が驟来る如くにて、高波打つてコウくと、岩端たゞくその有様の凄きと清太アヲ不思議や、ア一有難の天満宮、南無自在天神、あはれ主家の姫君を助けたたまへ」と一心不乱に手を合はせ、清太夫は祈つて居ります、この時將監は久松が持つて参りました竹の筒を取上げ將監、清太夫、これを見よ、いま悪事の計略見すべし」と大地を臨んで發矢と投着けました

久松桃太郎

筒は二ツに打裂れて、出でたる梅乾大地に轉び、梅酢が土に染
 ひと均しく、忽ち燃ゆる火船の有様清太、ツ、將監清太夫、
 毒土に覆す時は燃ゆると聞く、これこそ毒なり清太、ハ、ツ、
 ア、思へば、憎き久藏……將監イヤ捨て置け、今に娘は助か
 つて、恙なく金澤へ立歸るであらう、此方の船は波濤に漂ひ、
 七尾の府中濱へ着きまする筈なのが、如何なるゆゑにか越後の
 今町、目下は直江津と名稱が變りました、この港へ船が着きま
 した、岩谷久藏は難風の爲めに身体を痛め、やういふの事で船
 から上りましたが、初糸は幸ひに些かも身体いたまふ、これよ
 り今町に上陸なし、兩三日滞在の後、既に越後路を背後となし
 る山を經て金澤へ進入らんとする途中に於て初糸の大難、不
 慮な處で衆男に出會ふといふ話と相成りまするが、一息
 たしをしよう。

久松桃太郎

さて久松は初糸を伴れまして、今町をば出立に及び、彼處から
 旗傳ひに小泊へ出まして、徒屋敷を過ぎて参りまする道は北陸
 道で、音に名高い親不知子不知といふ處でございます、舊來加
 賀公が有力士といふ者を御抱へになりましたのは、大國を領し
 たまふ國守なればこそ、新様な力の強い者ばかりを擧げて御召
 抱へになりました、取て道具を持たすばかりの爲めに、如彼い
 ふ力の強い者ばかりを擧げて抱へたものではございませぬ、た
 ったこれだけの間を御通行なされるのに、大きな身体で腕に力
 のあるものを召抱へなすつたので、何となれば此處を行かすと
 も他に行く道があらうかといふ思召しもございませう、一が町
 人なと事變り、登々たる國守方が道を變へて参勤の禮にでも

久松桃太郎

参りまする時は、なか／＼手数は一ト通りではございませぬ、
 また加賀國は彼の道は難路だに依つて恐れて避けたなせといふ
 やうな事が、他國の大名にでも聞かす時は、一ツは恥辱に
 もなりませぬ、かゝるがゆゑに假令何程費用が要りませぬ、一
 旦御通行になつた道を妄りに御變へなさるやうなものではござ
 いませぬ、それとも何を非常な事でもあれば卒さ知らず、依つ
 てお力士と申し手先に力のある者ばかりがメツと手を解合ひ、
 大抵十足か七足毎に岩がございます、その岩は絶壁になつて、
 中に洞の如く穴が明いて居りますから、旅行をする者は、沖上
 り波の駆けて來まする時に、この岩の穴へ身を溶めて待ちませ
 る、するとド／＼と波が岩に打當ります、當れば一ト度沖へ
 ドツと退くものでございますから、退く間を見て、今度目波が
 押寄せて來るまでのうちに、また向ふの岩へ駆けて行つて、

陸に身を潜めるといふやうな、
 行するものでございませぬ、併し大名方は、三人や八人の通行と
 は違ひまして、假りに何千の何百のといふ通行人でもりませぬ、
 から、そんな事はして居られません、殊に大守は馬なり駕籠な
 りで、道は徒歩で御通行のあるものではございませぬ、漸く波
 濤に投げてある所の岩ぐらゐに、馬に乗つたり駕籠に召したり
 して、その儘隠れるといふ事は、到底出来さうな筈はございま
 せん、依つて若と若との間をお力士がメツと手を繋いで、沖か
 ら磯へ打付けて来る波を、
 て、その波を人間の身体で受けまするるのでございませぬ、全で
 抗の代りになるやうなものです、それです、此處は間諜突
 て居ると、親子が別れくとなり、波に巻かれて逆行かれ、
 それが爲めに命を落すやうな事が、往昔から度々ございませぬ

ゆゑに此處を親不知子不知と申します、此處へかゝつて参りま
 すると久藤は「モ、初糸さま、チ、モイとお待ら下さいませぬ、
 久藤、用があるならこの先の驛へ参つて聞くはどに、道行くよ
 へも恐るしい、音に名高い不親知、向ふの驛まで待つてたも
 久藤、イヤ、其處が此方の付目だ、現在家來の拙者が、いま
 打明けて言ふ事を、耳を澄まして聞きなせよ、彼の島の路で主人
 をば、歎いたのもこの久藤、皆立身と怒の爲り、貴様一人のお
 心で、島の流刑も呼返せ、そこで島田の辨さんに、諸と断り
 此方者、概しや肌身は觸るゝとも、別に疑も言ふでなし、
 處も丁度親不知、新う言出した上からは、逆も逆さぬ絶体絶命
 初糸さん、この久藤の言ふ事を、諸と聞きなせよ、こ
 の辨、初糸は無念の涙を、目に浮せ、
 ヤ、ア、人でもなしの若、各人、
 現、
 久藤、
 の、
 初糸に、
 聞、
 太、

久松桃太郎

や無禮者、假令斬られて死すればとて、父の敵の辨之助、島田
如きにも肌觸るゝ、この初終ではないはどに、殺さば殺せ斬らば
斬れ」と恐悟定めし女の一念、如何な腫む氣色も見えず、久松然
う強情を張りなまさりやア、最うこれまでだ任方がね、是非に
及ばぬ覺悟をなさし」と一刀スラリと抜き放ち、殺す心はなけ
れども、丈夫なやうでも其處は女、愛込んだらまた一ツ、睡に
ならぬものでもあるまいと、慾に眼の暗んだ岩谷、体を固めて
身構へなせば、此處を一生懸命の場所と、砂利を掴んで初糸は
久松目掛けて投着けますれば、前々よりお話申します通り、
この野郎一眼でございますから、片眼に砂が道入つたら、向ふ
が見えなくなりませす「敵對すれば是非がない、主の娘と言はし
て置かぬ、最うこれまで」と斬返ひ白刃、此方は心中憤り且つ
悲しみ「南無自在天滿宮様、憐れみたまへ助けたべたまへ」と

久松桃太郎

心裡に稱へ一心不亂、此方彼方へさまよふ折柄、沖より磯へ臨
来る波、さすがの岩谷久藏も、砂と波とに遮られ、思ふに任さ
ず口口く、危い中に初糸は、此方の岩に身を潜め、「南無天
滿宮加州の御家の御先祖、相道眞公」と一心不亂に念すれど、
誰れ一人も通る者なく、「今はこれまで情けなや、斬られて死す
も是非なければ、現在これまで使うたる、家來の爲めに一命を
落さん事の口惜しさよ、腫も佛もない世か」と空を眺めて打怨
言つ、またも沖より打来る白波、久藏もはや途方に暮れ、おの
れとばかりに斬返ひ折しも、何處ともなく飛來る小柄、天の助
けか久藏の、一眼を發矢とばかりに突貫しました、突貫されて
久藏はアツと首ひさも目を押へ、絶壁を便りに口口く、
尻尾に撞きと打倒れ、天から降りし、地から飛出せしか、何故な
れば、縁な事をと、地へて、折返、自らの方より、

久松桃太郎

一、大、未だ年、十八、九、歳、
 の小、袖、には、大、和、綴、子、を、以、て、製、り、た、る、
 の野、袴、を、穿、き、金、銀、鍔、め、た、る、大、小、刀、を、穿、し、
 寄、り、「ヤ、ア、無、頼、の、曲、者、其、處、働、く、ナ」と、言、ふ、よ、り、早、く、
 利、腕、打、た、れ、て、身、体、麻、痺、れ、何、條、以、て、堪、る、へ、き、
 助、け、下、さ、れ、ホ、ン、の、頭、割、の、場、で、發、り、深、い、仔、細、の、も、つ、て、の、事、
 と、言、ふ、で、は、決、し、て、と、さ、り、ま、せ、ぬ、初、巻、イ、ユ、く、
 に、仕、へ、る、家、泰、に、と、さ、り、ま、し、て、女、と、侮、り、妾、を、捉、へ、
 い、處、に、勝、出、し、叶、は、ぬ、事、と、知、り、な、が、ら、身、に、も、添、は、さ、る、無、体、の、
 患、難、こ、り、や、曲、者、で、と、さ、り、ま、す」と、眼、血、走、り、無、念、の、有、様、武、士、
 イ、く、承、知、い、た、し、た、假、令、如、何、な、る、事、あ、れ、ば、と、て、身、が、萎、た、
 る、上、か、ら、は、露、ば、か、り、も、驚、く、と、は、な、い、
 この、場、に、於、て、取、調、へ、る

久松桃太郎

も最と易けれど、何分危なき親不知、これより向ふに宇田の驛
といふ小驛のある由、兎も角も吾れ等と其處まで一緒に罷越せ
コリヤ曲者、身と同道いたせ久蔵、どうかお慈悲を以ちまして、
命ばかりはお助け下さりませ、武士言ひ甲斐もなき腰抜け、何
は兎もあれ彼れ此れ事はすと、吾れ等と諸共先の驛まで罷越せ
と、やうく親不知より八丁ばかりを隔りまして、宇田の驛と
いふ處まで引立て、御出でに相成り、唯ある宿元に立寄りまし
た、聽て久蔵を引捉へ、武士如何なる所以かその譯を、逐一此處
にて白状いたせ、言はぬとあれば是非がない、如何なる阿賚に
かけても白状させるぞ」と退引させぬ強き言葉に、流石の岩谷
久蔵も、戦々慄出し、さてこの方は何人ぞとさいます、久松桃太
郎、これは前回にお話申上げましたる加州の御四男子久松桃太
郎重政と申す方ぞとさいます、この仁が何ゆゑに、どうあらう

とも加州の公達、一人で以て御通行などのあるべき道理はない
方でもございませうが、これは國許に於き、筑前守重教殿といふ家
督の君をば、悪人共がなきものにせんと、始終狙ひ居りまする
就いては、這回老臣深見將監を能登の島の路へ流刑に行ひしなど
の事を、國許なる玉井市正、今井田内記、前田駿河の如き老臣
の者より、明細に認め、一々江戸表へ番送りせられたるころ、
江戸家老本多播磨守、長大隅守なども立會ひにて、重直公の御
前に於き、開封をば致しませうれば、若しき本國の大變にございま
す、甲恐れながら御前、豫慮ならざる這回の次第、深見將監は
御先祖以來由ある者にござりませうれば、なか、以て開流しに
は相成り難く、殊に八千石の食糧を辱なうする重役の者、私に
流刑に行ふなど、はああるまじき不埒の致方、依つて一應吾々の
うち一名國許へ罷越し、篤と事情を取調へましては如何なるもの

でござりませうか、主公捨て置き、甲此は何ゆゑ左様に仰せられ
まするか、主公然ればなり、知行に高下のおればとて、家老の悪
事に家老が参れば、取りも直さず仲間吟味と申して、一向持の
明かぬやう心得るから、國には筑前守殿も居られるとゆゑ、何
とかそのうちに話もあらうと、事もなげの挨拶、そこで長大國
はどの名士も、「ハア心得ぬ日頃の御志にも似合はざる主公の一
言、左様なる愚なる主君にもあるまい、妙な事を仰出さるゝ」
とは思ひましたなれど、鶴の一際、何とも申しやうがございま
せんから、其儘に心にはかゝれど捨て置きました、さて此方は
臣等の者に右の如く言ひ置かれました、人知れず四男桃太郎を
手許へ御呼寄せに相成りまして、主公如何に重政、汝表向きは諸
國修行を致する如く、臣等の者に申願れ、密かに國許へ立歸つ
て、篤と悪人をば取調へて参り呉れよ、様子はこのく、譯は云

只今の形にて捨て置く時は、家督筑前守の身の程も心許な
し、萬事汝の一存を以てし、叶はぬ時は日頃鍛へし武勇を以て
防ぐとも苦しからぬ、改めて其方に萬事を許す、この一番はこ
れは必ず正敷の時に持出して衆人に解示す方宜しからん」と
語り言はれ、委任状でございませす主公、就いてはこの一刀は、先
利家公肌身離さず軍中にも御所持ありしを、小松の利常公修
繕させ、常に傍を離さず御所持ありしが、其後代々家に傳る一
刀、これを汝に與ふべし、予を想しく思ふ時は、この腰物を以
て予と思ひ、また家の悪人を、自然斬棄てんければならぬ時は
予に代つてこの一刀を以て斬捨てよ、就いてはこれなる鐵扇を
も取らす、これは予が常々傍はなさず秘蔵いたせしものなり
これを以て折檻いたすも苦しからぬ」と金の象眼にて「背の間
は都の空を照らすもせで、心盡しの有明の月」と重相道興公の御

歌の這入ッてございませす鐵扇、これを御與へになりました、御
手許金をば出して、「これを旅費として一刻も早く人知れず斯く
新様に計ひ國許へ罷越し呉れよ」と仰せられました、そこ
で智勇兼備の御名君、忽ち長屋へ引取り、細やかに認め、吾れ
は加州の連枝なり、別段浪人をして諸國を遊歴するとも、敢て
當家に差支へもこれなく、今後上より御尋ねあらば、汝等の一
存を以て然るべくやう御上へ届け置き呉れるやうといふ書面を
長大隅守宛にて殘し置きその儘夜中本郷五丁目の御屋敷を出立
といふ事に相成りました、翌くる日に相成り、長大隅守右の書
面を見て、大いに驚き、此は容易ならざることを、取分け末子と
いへる者は可愛きもの、熊ぞや御上に於ても、御心痛ならん
直ちにこの旨を重盛公に言上に及びますれば、莞爾と笑をなし
たまひ、「彼れは日頃の行ひといひ、文武の道にも長けて居る者

なれば、差して驚くには及ばぬ、捨て置け、大隅、苦しうな
 いと仰せられました、ハテナと長も案外に心得ました、何
 分主人の仰せもあれば、心には懸れど、七歳や八歳の幼穉の方
 とは事變り、器量勝れし御公達、はや十八歳にも御成り遊ばす
 とゆゑ、然のみ案ずる事もあるまじと思ひながらも、尙も傳役
 の百々平、儀太夫に尋ねて見ますれば、兩人も顔色蒼翠りて
 驚仰天、なれど當時の重端公は苦しうないといふ仰せもあれば
 我方なくその儘に致し置きましたる事でございますが、何か親
 子御相談の事なれば、親主公の御驚きは些かもございませぬ、
 この仕合せにて今此處へ桃太郎君は御出でに相成つたる事
 でございます、併しこれは初糸も知らねば久蔵も知るべき道理は
 ございませぬ、重政殿にして見れば、彼奴に白状させ、何か知ら
 ぬ許の悪人の儀に就いて幸ひの手懸りも出来るならんと思付か

れましたから、其處で段々の御吟味でございます、今は久蔵も
 堪へ兼ねまして、遂に太田筑後守、土井伊豫守を始めとして、
 その他四五の重立つたる役人、志を一ツに致し、當時家督の君
 筑前守殿を失ひ、富山の御養子と相成つたる淡路守殿を以て加
 州の家を横領せんとまでの謀反の始末を、荒増白状に及びまし
 た桃太郎、確とこれに相違ないが久蔵毛頭低りは申しませ
 ん桃太郎、何思ひけん久蔵を引捉へ、行きなり小柄を引
 抜き、耳と鼻とを殺いで御仕舞ひなさいました、若谷久蔵もこ
 の時は何うも奇的烈不思議な聲を發して泣出しました久蔵、この
 上は御慈悲に殺して下さりませ、目が見ゆるから出世がしたい
 鼻があるから食ふ物の香氣も分ります、耳があるから聞ぬも
 します、恠く鼻は殺がれ目は見ゆず耳を斬られてこの通り生き
 甲斐もないこの久蔵、何卒御慈悲に御殺しなされて下さりませ

久松桃太郎

桃太「彼れ此れ申すナ、神妙に致せ」とこれより宿元に何程かの心付を置き、初糸、久蔵の二名を伴れ、遂に當處を背後になし、磯波より横山、小川、境町と出て参りました、此處に富山のお關所がございます、この關所までかゝりますると役人「待たッしやい、何處へ通行召さる桃太控へよ、目で見て居ッて分らぬか、此處を向ふへ赴けば否が應でも富山へ参る、何處ぞ他に行く所があるか役人それは分ッて居ります桃太分ッて居れば尋ねるに及ばぬ役人イヤ御姓名を伺ひたい桃太「我名を尋ねんと致すか、身に曇りなければ聞かさぬものでもないが、我名を聞いて何とする、この關所は公けの關所にあらず、言はゞ富山の領主松平淡路守の一存を以て設けある關所であらう、ムウ、尋ねるどあるなら語ッて聞かすべし、謹んで承れ、予は加賀少將重頼の四男久松桃太郎重政と申す者である、但し加賀家の嫡子と

久松桃太郎

止めて調べよと、淡路守から沙汰がもつたか役人「ハ、ッ、誠に何うも恐れ入りましたとございます」と飛下ッて大地に手を突き平身低頭いたしました桃太「第一汝等の心得違ひ、若年者が年齢の女を伴れて通行いたすがゆゑに、其方達は懸まんて心得て、斯様な事を致したものであらう、公けの關所の關に限らず、總て通行人を調べる者が、人を見て懸むといふやうな心得で居ッては間違を生ずる、畢竟予は本家金輝の者ゆゑ間違はないが、萬一他國の大名の次男三男であらうものなら、それが爲めに富山松平淡路守殿とその大名と如何なる不和を生せんも圖り難き事である、賊に千疊の土境も一穴より勝るゝとは、斯様な事を申したものである、統度戒むべき筈なれど、汝等如き者を投へて諭するも無益、依ッて許し置く、以來は統度領り上役人恐れ入りましてござります、切めて御城下まで御案内を桃太「左

久松桃太郎

機な事に及ばぬ、此方が勝手に遷る、それよりも開所を大切に
守れ」と言ひ置いたまふ、これより辨通川を打渡り、越中新川
郡富山へ御着になりましたして、旅籠町の下條屋新右衛門といふ宿
元へ泊られました、その時は只向ふも氣が付かず、身分ありげ
に見ゆる居りますすけれども、敢て何處の若殿やら旗下の御次男
やら御三男やら、只人柄な武家と見るだけの事でございます、
亭主を呼んで、「何うかこの者は何處へなりとも頼り置いて、空
腹にならざるやう、食事を與へ、其方に預り置いて呉れ」とあ
ります、新右衛門、これは何でござります、桃太、イヤ別に盜業を
した者でもない、少と此方が仔細あつて召伴れ参つたものであ
る、些か過失あるを以て、耳鼻を殺ぎ、此くの如く致し置いた
亭主「畏まりました」とこれから旅籠の若者に吩咐けて、久松を
引立てさせ、裏の木納屋へ轉り付けさせて置きました、とこる

久松桃太郎

が桃太郎殿は初糸諸共奥の一室へ亭主が案内に依つて御廻りに
なりました、直に翁形の風呂敷包みを解きますと、初糸は受
取り傍に置きました桃太郎、その包みより衣類を出し呉れよ
此處まで参れば最う衣類を着替へても可い」と驚て御召替をば
御着替へになりました、此は抑も如何に、術師の御定紋が付い
て居ります、亭主はこれを見て「驚いたしました、何うも加賀
の御領分へ参つて、術師の定紋とあれば、非常に人も驚いたも
のでござります、さてはこの方は加州家に由ある方ならんと存
じましたから、ソレ湯を立てよ、御料理に氣を付けよと、俄か
に亭主は周章出しました、待てば程なくお茶お菓子等、萬事位
りなく鄭重なる扱ひを致しました下女お客様、お湯が沸きまし
てござります、桃太、左様か、然らば湯に通入らう、これから
お湯も済み御膳部も了りました、初糸を手許に坐らせ、四方

八方の浮世話をして居られますが、假りにも猿轡な事はござい
 ません。此方も八千石の家に生れた娘ゆゑ、極く町内に取り扱ひ
 を致しました。宿屋の亭主は見當が付きません。「ハテナ、御愛
 妾でもない様子、殊に供なれば新様な奇麗な女をば作れる氣遣
 はないが」と何の事だか一向分りません。それは無理のない事
 で、とところが初糸は、不圖耳を澄まして聞くと、鹿架離れた向
 ふの座敷に、ワイ／＼と男の聲が致し、或時は女の聲が致し、
 舊時經つうちに、三弦を弾いたり踊つたり舞ふところの足音な
 どが致します。物珍しいは身分のある人の常でございますから
 初糸御前様、彼れは何でござりませう。桃太郎然れば何であらう、
 恐ろしい騒がしい事である。障子を開けて見よ。初糸御免とば
 します。そこで起つて参つて、初糸は障子を開けて向ふを見ま
 すれば、凡そ十二三番も數ける座敷で、圓狹く坐つて居ります

るのは、武士体の者が十二三名、四五名の遊女を呼んで、酒宴
 を開いて騒いで居りました。暫てそのうち一名は起つて便所
 にでも参らうと、動々體々なしながら「甲ア、これは、非常
 に醜態を致した、今日はと面白い日はなかつた。乙北村危ない
 ぞ。甲「笹川、ナアコ大丈夫」と云ひつゝ便所に這入らんとして
 思はず初糸をヒョイツと眺めました。「こりやア何うも怪しから
 ぬ美しいものだ」と言ひつゝ便所へ這入りました。暫時經つ
 と始眼しながら、兩名は元の所に來り、手をポン／＼と打瞞し
 ました。甲「コリヤ亭主は居らぬか。新右ハイお呼び遊ばしして
 甲「新右衛門、この向ふの座敷に婦人が居るのウ。新右「ハエ、
 左様でござります。今晩御泊りになりました。甲「何名はと作立
 ッて居るか。新右「イエ別段に何名といふ程の大勢様ではござりま
 せん。オノのお武家一名と、今一人怪しの者を召捕つて作れて

久松桃太郎

けて参り、ガツ、舞子を閉けまして「無禮なる言を吐いたるは其方であるか」大抵な者なら猶も致しませうが、ヒツともせず、火鉢の側に御座へわりし重政殿、形を正し大音に桃太無禮と言ふは汝等なり、アノ此處な偽武士め、甲ナ、何だ偽武士とは聞き捨て難きその一言、何を以て偽武士と申すか桃太然ればである、武士の道を辨へて居るか、假令加賀が薩摩が仙臺でも他國の武士に向つて、件参つたる婦人をば、汝が座敷へ呼寄せて、酒の酌をさせんなどいふやうな事は、主人から許してあるか、総しや汝は金澤藩にて、如何なる用向あればとて、旗の武士の件参つたる女を汝が座敷へ呼寄せ、酒の酌をせいななどいふ無禮なると、これ士道に於て決してこれなきところの事なり、武夫は物の辨れを知るといふ、町人などなら尚更のと、勞つてやるべきが武夫の本意、己れを知つて他を知らず、此方

久松桃太郎

を何種身着るものか辨へずして、妾りに女を同道して座敷へ参り一歌酌めなどとは奇怪千萬、武士の道知らざる奴であるから、偽武士と申したが如何いたした、甲、エ、ツ無益の論には及ばぬ事だ、方々、やつて了ひ召され書々心得た」と候若無人の生際連中、下條屋敷右衛門は、ソツ始まつたど、戦々然と致しました、此方は構はず扱連れて、いよ、荒れに荒延らんと致します、桃太初糸、初糸、ヘイ、「貴が矢立が其處にあるから、いまこの場で此奴等を片端より打振る、一々姓名を尋ねるから、其方書記し置け初糸心得ましてござります、女と雖も深見の娘に心得がござりますから、少しも罷しません、折柄泥酔漢は扱連れて、左右より斬付けを、心得たりと桃太郎、有合ふ鐵扇手に取つて、忽ち左右に打付け、また飛びかゝる一人を、發矢とばかりに放せば、急處を駈られて此は如何に、頭破れと

久松桃太郎

打撃るを、起しもやらで一人の襟野提つて肩にかけ、ドンと投
けたる衣被さ、流石は部隊剛の門人、武術の奥義を極めし桃
太郎、彼奴等如き者幾十人參らばとて、手玉の如くに投着け、
或は魁倒し拵振るる、その勇しき有様に、一同の武士は呆氣に
取られ、眼も眩め顔色蒼醒りるを重政は「ヤア、一々に姓名を
語れ、甲、ド、何卒命ばかりはお助け下さりませ、桃太郎、彼れ此れ申
すナ、コリヤ、下條屋新右衛門は居らぬか、若者へエ、エー且
那は只今池ノ奥つて、富山の役所へ斷着けましてござります
桃太郎、イヤ町人なれば左もあるべし、コリヤ若者、若者へエ、
エ、桃太郎、彼の木納屋とやらへ繋いである目鼻のない奴を此處へ引
立て、參れ、若者心得ましてござります」とこれから久松は終ら
れたまゝ、伴れて來られました桃太郎、コリヤ久松、只今この處で一
々姓名を名乗らせる者があるから、其方附き置いて敷ねがあら

久松桃太郎

ば覺ねあると申せ、久松心得ましてござります、桃太郎、如何ぢや
一々名前をば申せ、因、新様なる駱駝を受けまして、吾々武士た
る者、面目なうて申上げられません、桃太郎、申さぬとあれば、新く
して呉れん」と鐵扇を逆手に取り、金目の所を脊骨に當てがひ
生來ての大力の桃太郎腹に、グツとばかりに幹られました、五
体は碎け、骨も折るゝの思ひをなし、因、ア、痛い、く、く、モ、
申上げます、手前は太田左京と申します、桃太郎、ウ、してこ
の者共は、左京荒巻與市、志村忠八、北村捨三郎、笹川太郎平、
堀越友助、吉見辰藏、小泉元治郎、熊川左源太、小川治三郎、
木原龜太郎、以上十二人にござります、桃太郎、人数は申さずとも、
此方に心得て居る、久松、此者共に體ねがあるか、久松は「へ
エ、皆覺ねがござります、桃太郎、ウ、左様か、コリヤヤ、其
方共はこの者を存じて居るか、左京へエ、新様な稱代な目も鼻も

ない奴は、一向覺わがとざりません久松元談な事を言はしや
るナ、拙者は岩谷久蔵でござる左京ア、爾は岩谷久蔵か、如何
して新様な目に遭うた久蔵へエ、譯はこれく島田氏に頼まれ
て、飛んでもない目に出遭ひました、各々方は御存じあるまい
が、此處に在する御方は、加州の御四男久松桃太郎重政公と
せられる若殿でござります」聞いて一同喚驚仰天、さては江戸
表に於て時の御有りなされたる、これが久松重政公かと、何れ
も皆々保上りました桃太其方共は謀反の荷担人ならん、魂消を
つたか首々へエ、恐れ入りましてござります」折柄戸外に物音を
いたし、馬にて駈来る一人、これなん富山の拙方にござります
るが、桃太郎殿と知らず路込んで参り、一ツの大腰刀を惹出す
お話、次回に。

エー下條屋新右衛門の訴へに依つて、馬上にて駈着け参りまし
たは、富山の目附吉村清六郎と申す者でござります、狼藉者
が泊合はせ、加賀より使者に参つた武士を、理不盡に打据ゑた
どの趣でござりますから「御用、静まれ、神妙に致せ、何ゆゑ
當地へ罷越し、去る無禮を致すぞ」と大音に呼ばりました、こ
の時久松桃太郎は、右の手に鐵扇を携へながら、宿元の藝所に
來り、中央に突立つて桃太ヤア狼藉者とは片腹痛さその一旨、
汝は富山の藩士にて、何と申す奴か、名を名乗れ清六郎、桃
平淡路守殿領分に罷越し、傍若無人の亂暴を致しながら、目
役人に對して無禮の一言、其方こそ何處の浪人にて、姓名は何
と申す者か、神妙に申上ぐべきに、左はなく致して、突立つた

久松桃太郎

まゝ無禮の一言、悪意に伏つては繩を打つて引くを桃太郎、
汝等如き分際にて、予に向つて無禮千萬、我姓名を尋ねんども
らば語つて聞かせむ、隨んで承れ、加州の少将重勝が四男、久
松桃太郎重政とは予が事である、加州の速枝が金澤の藩士を折
檻いたしたに、何ぞ富山の咎れを受けんや、立歸つて松平淡路
守へこの趣を申せ、それとも汝彼れ此れ申す事があるか、如何
である」との一言に流石の清六郎もハツと驚きまして、後の言
葉も出づればこそ、その場へ平伏を致しました、その儘戸外
へ飛出し、驚きある馬に打乗ると均しく、一ト鞍打つて城内へ
引返し、右の趣を御上へ言上し及びましたものと見ゆ、可成馬
にて駆けつけて参り、通回は馬より飛下つて、早々桃太郎の居室の
庭前へ廻り、飛石の上上手を突きまして清六主人義守殿左様
仰せられます、是非とも御城内へ一應御歸し下されたく存

久松桃太郎

じます、桃太郎、御中とは申しながら、富山の藩士が予をば
呼付けるとは何事である、願向あらば相違なる重役の清を以て
名代として、予が許へ還せ清六ではござりまするが、是非とも
に御願ひ申せとの主人の仰せにござります、桃太郎と左様申した
か、清六御意にござります、桃太郎、少と不慮の至りなれど、
ひとあらば此方が参つて得ますであらう、其方は先へ立歸れ
そこで清六郎は「何分宜しう願ひ奉る」と顔み置いた儘で立歸
りました、桃太郎殿は着流しのまま、大小刀を懐たへ、例の趣
扇を握つて立出でんとする際初糸は「若様、御出でになります
か、桃太郎、参る、心配する事はない、併し初糸、悉く利腕を痛
め、身体の自由にならざるやうにして置いたから、如何する事
もなるまいが、萬一逃げんとする事あらば……下録屋新右衛門
新右、ハ、ハ、桃太郎、只今この番人に申付け置いたが、裏に構りある

ところの幽霊共、俯し一人でも逃げんとするやうの事あらば、其方始り家内の者共、手々に獲物を捕へて、片端から打交てる。とも苦しうない新右衛門承知仕りました桃太一人も逃す事は相成らぬぞ」と頼み置いて出て行かれました。さて富山城へ参り大手より道入りまして、お目附所にかゝり桃太使ひに依つて久松桃太郎罷越した、案内を致せ」と訪ひますると、ハツと答へて目附役人、御案内を致し、玄關より通しました。膝をお中の口まで参りますれば、お坊主に右の趣を傳へますると、中の口よりお坊主が案内で、書院へ向けて通しますると、袋路守殿早くも御控へなすつて、眼血走り、餘程激して居られる様子に見ゆます、桃太郎殿は事どもせず、袋路守殿の目通に立ち桃太、コリヤ坊主、予が坐所は何處であるか坊主、ハ、ハ、何處へなりとも思召しの處へ桃太、舞を持って坊主、ハ、ハ、桃太、客番置はいかぬ

淡路同等の禰を持って」とその見識の廣しいのに驚きました。坊主は取つ指いつ、驕て主公の數替への御裾を持って参りました。するとその上に控乎と坐し桃太、淡路殿、何事でごさるか「膝に手を突いて張儀を致し、尤も大剣は右の所に置き、鐵扇を前に置きまして、ハ、ハと利幹殿の面を睨付けました。威嚇つて、さその體は、實に恐るゝばかりの勢ひにございます。この時淡路守殿は、疍が立ち切りましたか、舌が縫れて言葉急しく淡路桃太郎」と一言仰せられました。が、桃太郎殿は空吹を致して、禰を仰向け、一向御返事がございませぬ淡路桃太郎殿「この時やうく呼びました返答を致しません淡路桃太郎殿」この時やうく此方を見返り桃太、何事でごさるか淡路、何ゆゑ雨度まで呼ぶに應答を致されぬ桃太、然ればなり、兄とはいへ御貴殿は分家の領主富山へ入家を致されたれば、富山の領主なり、部屋住無殿の重

政といへど、手前は本家の伴でござる。分家の領主の其許に、
 名を呼流しに致されては、父重頼殿に對して申譯がない、して
 この處へ呼寄せられしは如何なる譯でござるか。淡路、井は餘の
 にあらず、何ゆゑ予が領分へ用向あつて罷越したる者を、妄り
 にうち打擲を致し經を打ち召されたか。桃太、別段經は打ちません
 彼れ等が所持の下緒にて、片端から縛めたいけのこと、併し經
 打つたところで、別に何う斯うはござるまい、彼の者は富山に
 用向あつて参つたものでござるか。淡路、左様、桃太、してその用事は
 済みましたか。ヤア此處で淡路殿の答へが窮つたのでございませ
 す、用事は済まぬと言へば、本家金澤より分家富山へ用向があ
 つて罷越したやうな者が、宿元にて遊女を呼び、酒宴を開き
 傍若無人の殿所爲を致すなど、は、甚だ心得違ひの至りである
 から、縛めたいと言ふであらうし、用事は済んで仕舞うたと言へ

ば、また先方では障機應變の答へをするであらうし、何方にし
 たところか、この者才智器量の勝れた者と思へば、隠して返答
 が出来ぬました、何分疝が立ち切つて居りますとゆゑ、暫時
 して淡路、用事は済んだが、用事が済めば打擲しても苦しうない
 と申すのか。桃太、用事が済めば加州の家來、打たうが殺さうが富
 山のお指圖は受けるに及ばぬ、此方打つべき譯あつて打ち、主
 人縛めるところの仔細あつて縛めたのでござる、御身は我爲め
 に兄どはいへど、當時分家の御養子である、富山の家を相續い
 たせば別家の領主、手前は部屋住でも本家の伴、その本家たる
 金澤の家來が、心得違ひを致しなば、腕を折らうとも足を折ら
 うとも、將た縛めやうとも、一命を取らうとも、其許のお指圖
 を受ける附れはない、言はゞ大きにお世話でござる、斯様な事
 を被れ此れ申すは無益の論、用事といふは只それだけの事であ

久松桃太郎

さるが、この他にあらば承らん、如何でござる利幹殿、淡路よ、
「全くそれだけ……」と仰せられましたか口籠りまして當然の理
に伏せられ、一言もいふ事は出来ません桃太郎、別に御用もなくば
桃太郎引取りまして苦しうござらぬか、それとも問はるゝ事あ
らばお答へ申さう、返答如何淡路守殿、淡路よ、……と只窮へ
て物言ふ事は出来ません桃太郎、三度お尋ね申して仰せなくば、全
く用はないと見ゆる、御免下され」と腰物を提げて、左の手に
鐵扇を持ち、その儘スツと起上りました桃太郎坊主、案内を致せ
愆々々案内に件れて玄關に出で、宿屋の木履を足にかけ、その
儘下宿屋新右衛門方へ引取りました、此方は富山の淡路守、唱
然太息を御吐きになりましたが「さても恐ろしるさ奴、江戸表
に於き噂の高き桃太郎、文武に長けたる若年者と、聞いては居
れど今日久々の面會、大膽不敵の彼れが舉動、こりや容易なら

久松桃太郎

ぬ事が出来たわい」と大いに恐怖を抱き、直ちに殿臣の者を召
し、まして、相談の上、彼れより先に屋敷にある太田筑後、土井
伊豫守の者共へこの事を傳へ、桃太郎金澤に参らざるうちに云
々の準備を致すべしとの御指圖でございます、依つて直さま
飛脚を以て、桃太郎國許へ歸るまでのうち、途中に於て云々に
計ひ、一命を取つて了へどまでの趣を認め、た書状を送られまし
た、不日到着するや否や國許に於ては、開は若しき大事なりと
かねて申合はせたる一味の者のうち、武術に秀でし者、且つは
雇入れの浪人にて火術に長けた者など、それ／＼手配りをさせ
道中に待伏せをして桃太郎殿を襲取らんといふ手段に及びまし
た、さて此方は桃太郎殿、旅籠町の下宿屋新右衛門方へ歸りま
すと桃太郎初糸、只今立歸つた初糸お歸り遊ばしませ、御前、
何事もござりませなんだか桃太郎イヤ何事のあらう道理はない」

久松桃太郎

する、コッ、と笑を含んで桃太郎殿は、追分に御掛りにな
りましたが、小杉までは三里でございます。此處から二里半
りますると、高岡、建野といふ間の驛を過ぎて今石動といふま
でが三里、これより越中と加賀の國境なる俱利迦羅峠と申す處
でございます。これを降れば下は竹の橋驛でございます。が、
何分女を伴れ添に身体の痛んで居る者を引伴れかたぐ致しま
すから、道の程も思ふやうに抄取らず、時に享和の三年二月七
日はや日暮と相成つて、木葉の間に七日の月は、爪形の如く
出でました。此處は名に食ふ俱利迦羅峠、昔に名高い前阪山、
立樹の蔭に鱒波、ワツとばかりに立ちますれば、何思ひけん桃
太郎殿「初糸々々」と聲を御掛けになり、手に持てる鱒魚を初
糸に渡し桃太郎若間に滑んで身を逃れよ初糸心得ましてございま
す」尾を上げて薪りある十三名の者共の半をハハと片傍の谷へ

百四

久松桃太郎

尻落せば、悉く驚いでございますから、皆一時に轉り落ちまし
た。桃太郎殿は左の手に大劍の結目の所を握り、柄に手をかけ
身掃へを致す折しも、ズドンと一發飛來る銃丸、ホッパと体
を躲しますると、鉛丸は首筋の透りを摺つて背後の立樹へド
と應へて打當る隙を窺ひ大音に桃太郎ア何奴なるか曲者、加
賀家の四男重政に、飛道具を以て向ふとは無禮なり身性の暴動
此處へ出で、勝負を致せ」と呼はりました。スルト彼方の樹
よりも此方の樹蔭よりも、槍先飛へて二十名ばかり、矢先に突
掛つて参りました。桃太郎は必得たりと、大劍スラリと振放ち
松の大木を木橋に取つて、獅子奮迅の勇をふるひました。何
しろ南部寅之助が門人、槍劍は無類の達人、十四の年に師匠が
手を置いた程の腕並なれば、看るくうちに兩三名、水もたま
らず斬落す、その早さと雷妻の光るよりも早く、陰き暗んで突

百五

掛るを、事ども致さず縦横に、まくり立て斬立て、四角八面
々々「ソレ迷すナ撃取れよ」と追々壘みかゝつて斬込むを、
縦横無盡に斬抜け斬倒し、飛上つては斬下し、片膝突いては腰
を拂ひ、右に拂ひ左に斬抜け、實に威すべき所の手並でござい
ます、折柄向ふの方より馬上にて土砂巻揚げ馬の平首に槍を押
當て兩名宙を飛ぶ如く斬來る者あり「狼藉者其處動くな、唇な
くも加賀家の公達重政公に無禮をなす奴、一人も助けは置かれ」
と言ひながら参りし兩名は、これ加州の老戦にて、前田駿河守
不破彦三にございます、さてこの二人が此處へ参つたといふと
の譯は、その日金澤御城内より下城をせんとして、兩名玄關へ
かゝらうとします時、お坊主の今泉才三といへる者手を突き
才三これは大夫にござりまするか駿河よ、何ぢや才三「この今
泉といふのは、少と悪かな賢でございますから「また詰らぬ事

とば尋ね居るのであらう」と心得られ厭煩く思はれました才三
「今日大奥にて土井伊豆守と太田筑後の御兩名が駿河よ、御
伺いたした才三桃太郎々々このやうに申して居られました
駿河よ、才三それが江戸から戻つて來る途中、富山で何か彼れ
此れがあつて、今にも當金澤へ進入りなば、吾々の迷惑、片付
けて了ふには、竹の橋驛、前阪山の間にて撃取れば充分の都合
なりと、新様なお話でござりました、何の事でござりまするか、
一向私には分りません、桃太郎といふのは、昔話のやうに思
て居りますが、何事でござりませう駿河オ、左様か、何時頃で
あつた才三先刻でござります、駿河清左衛門、清左へ、駿河これ
なる才三を身が屋敷へ伴歸り、吾れ等が引取るまでの間、屋敷
に留り置け清左へ、心得ましてござります、駿河才三、駿河
が屋敷へ参つて待つて居れ才三心得ましてござります」其處は

馬鹿でございますから、何が何やら分りませぬ、すると不破三は「ヤア、喜内、汝これより伴八彌殿方へ罷越して、云々傳へ用意を致して跡より竹の橋驛までお越しあれと傳へ置け喜内、して尋公方には、彦三、これより直さま前阪山まで罷越さん喜内、御用意は彦三、ナ、斯様な事に用意が入らうか、ソレツ」と云ふなり肩衣拂ひ槍箱はらうたその儘、真一文字に露出し、前阪山へ逸散に驅來りしましたは斯る次第でございます、依って兩人は隠れ参るや否、背後の方より當るを幸ひ、遠慮なく突立てました、前は桃太郎殿に斬立てられ、後は不破と駿河の兩名が突立てる槍先の鋭さ、一人も残さず、片端より一命を絶ちました、この時馬から飛び下り駿河、ハ、ハ、此は若君にござりますか、前田駿河でござります彦三、不破彦三にござります桃太郎、大儀であつた、いつに變らぬ故事が忠心に過分に存するぞ、身

は江戸表にありといへど、様子は残らず承知いたして居る、若君には九んだか一人にて桃太郎素より、なれどこの山陰には深見將監が娘初糸といへる者隠れ居るから、初糸を助けて遣せ彦三心得ましたと、彦三は此方に來り「初糸のく」と呼ばりますと、恐るく「ハ、ハ」と答へて鐵扇を携へ出て参りました初糸も、駿河殿にござりますか、彦三殿にござりますか兩名も、恐しや、如何なる時にて若君の御供を致されしと桃太郎「これには色々譯あると、それは後して金澤へ参着の上で、委しく話を致さん、兎に角竹の橋驛まで罷越すであらう」こりより竹の橋驛へ不破、前田が御供を申上げて初糸諸共魚屋重藏といふ行元へ御着になりました、所へ梅鉢の御定紋付いたる高張提燈を立て、徳原越六、伴八彌、馬上にて百名の人数を引率れ、御迎ひかたぐ、罷越しました、それと見るなり馬より下り、早速若君

久松桃太郎

へ御挨拶を申上げ、兩名卒に御返ひに出でましてござります。桃太、大儀々々、して其方は八彌、伴八彌にござります。勘六、後原勘六にござります。これは何れも加州の皆重役、家老の席に列なる人々でござります。桃太、大儀ながら足輕を幸ひ、谷間に蹴落しある者十三名、皆これへ伴れて参りて呉りやれ八彌、ハ、ハ、心得ましてござります。とこれより蹴落しあるところの十三名を引伴れ、竹の橋へ取つて返しました。八彌してこの者共は如何仕りませう。桃太、先に國許へ引き、玉井市正へ預けるが好からう。この時確と勝を打つて駿河、不破の兩人は威心を致しました。此は國許に於て、大儀忠臣の者は誰れくといふ事は、御承知の上、御歸りに相成つたる事であらうと二人は驚きました。駿河さて若君にはお食事、桃太、イヤ差して欲しうもない。玉三、汝はどの初糸は預け置くから、其方方に預け置くとも、野九、今井田内

久松桃太郎

記に預けるとも、然るべう取計うて呉りやれ。玉三、心得ましてござります。桃太、駿河、大儀ながら予と同道を致して呉れ、駿河、承知しました。御供仕りますのでござります。伊し拙者がこの馬に、失禮ながら御召し遊ばしては、桃太、イヤ、予は馬なせに乗つて歸らぬ方が宜しい、少々思ふ仔細もあれば、駿河して何處へ御着あそばします。御心底で、桃太、幼少の初りに故郷を出で、身が屋敷といふてもこれなくば、城内へ罷越さんは兄へ恐れあり、就いては十一家の里、植木屋、宗太郎方は、先年父君に面會いたした所ゆゑ、矢張り十一家、宗太郎の座敷を借りる事に致さう。駿河、此は恐れ入り奉ります。桃太、苦しうない、勘六、勘六、ハ、ハ、桃太、汝先へ歸り、植木屋、宗太郎へ右の趣を傳へて呉れ。是にて後原は十一家の里に罷越し、植木屋、宗太郎に右の趣を傳へ、その準備にかゝりました。桃太、駿河、不破等の人々に伴は

れ、前後は足輕徒士の者共が護りまして、十一家の里へ御着になりました、この事を聞いて驚いたのは、彼の太田、土井の兩名でございます、サア、これからが大國許の騒動、十八歳にして、この騒動を一人にて治めやうといふ、久松桃太郎殿の動らきにございまするが、チロイと一ト息いたしまして申し上げます。

第六回

さてこの十一家の里の植木屋宗太郎といふのは、桃太郎君の附人、當時江戸表に残し置きましたる久松百々平、時懸儀太夫の兩名が、亭主宗太郎を頼み、この宅に於て當時江戸表に御在である重盛公とこの桃太郎君との御親子御對面をおさせ申したのでございます、其處で御自分は何れも御親故もあり、前回にも申上

げます通り、幼少の頃はひより父君に従うて、江戸へ参られた方ゆゑ、國許にこの御方の屋敷といふのは別段にございませぬ、依つて十一家の植木屋方の座敷を以て、御自分の居室となされる思召しにて、當家へ向けて御着になつたのでございます、御着になりましますと、今井田内記は直ちに参りまして内記御不都合にはござりますれど、手前屋敷へ御引取りあつては如何でござります、桃太郎厚志は過分に存すれど、予が這回國許へ罷越したは、少と望みあつて参つた者ゆゑ、其方達の屋敷に在つては、その計ひがなり兼ねる」と言ふは、今井田内記は一万四千石の大身でございますから、迎も今井田の許に御在であつては、曲者も近寄らず、それでは桃太郎君がこの國許の悪事を取調べる事がなり兼ねます、御自身は身命を擲つて國許の悪人共をば根絶しをなし兄親前守殿に仇する憂ひを除かんといふ大役をば

附けられて國許へ御歸りになつたのでございますから、迎も老職の屋敷などには御在でになりません、また内記も不備は御事も言はず、馬鹿ども伶俐ども付かぬやうな質の人、大休このお方の精神といふものが分りません、只不斷登壇をせられまして、何を尋ねても知らぬといふ事はない、問へば應答は致しませんが、併し大身だから評定の席にて相談をかけますと、それは悪いと言ふた事もなければ、それは善いと言つた事もございませぬ、只衆人の心に任せ、多數評議の一決する方へお任せあるが公平で宜しからうといふやうな質で、それは然うでございませぬ、世の中の事といふものは、況して斯かる御大家の一國一城の大奥に於て、十人忠臣があつて百人叛逆人があつても、下様の評定をば取り、明を聞く時は、必らず善に荷擔をする者が多く、悪に味方をする者は少ないもので、依つて多數の評定

になれば、多い方に任して置けば間違のないものでございます、何に依らず總てが然ういふ質の仁でありますから、それは不可ぬのこれは斯うせいといふ事は、誓つて言ふた事はございませぬ、そこで内記といふ仁は、寢入猪と異名を博つた位か、いづれ中へ出ましても、扇を突張つて目を開いて俯向いて居ります、寢て居るのか知らぬと思ふと起きて居ります、丁度これは鎌倉時代の因幡守大江廣元に均しき仁で、一寸諸君に一言申上けたいのには、畠山と因幡守は何方が知らいと思召す、彼の源平の軍談を申せば、何事に依らず畠山が管轄を施して居るやうでございませぬ、これに引替へ因幡守といふ仁は、俗にいふ沈香も、かす屁も放らずといふ質の仁で、これが善いともこれが悪いとも、言ひ切る程の論をしたといふやうな事は、源平盛衰記に就いて見ましてもございませぬ、然しながら終りを以て知るべ

久松桃天郎

し、和田合戦の初りに、島山は鶴ヶ崎から落来る急流、中仙道は小前田の片傍掛原伊賀原と申して、彼れを一名二股ヶ原と申します。彼れに於て愛甲三郎の遠矢にかゝり、終に果敢なく落命を致しました。死骸はす々に斬刻まれ、情けなき最期を遂げました。然るに何時も殿中で坐懸つて居た因幡守大江廣元は、和田合戦の初り、何處へも味方をせず、其處で彼れの家筋はといへば、周防、長門、伯耆、播磨にあつて大國を領し毛利右馬頭の世に至つて家康の爲めに知行所を切取られ、煎じ上げたる後、徳川の世になりまして、十八國守の一人、長門國に於て、三十六万石の知行は取つて居られました。島山の末とを考へ合はせて御覽あそばせ、彼れは漸く下總結城の片傍にて、近き文久度の頃まで、島山菊丸と仰せられ、その子孫は偽か手擧はどの陣屋の領主でございしました。此處を思へば因幡守

久松桃太郎

の方が、遙かに高山よりは上でございませう、この今井田内記といふ仁も、常に何事も言ひませんから、忠臣者も今井田内記をば常に頼みにしません、悪人は素より、彼んな役に立たぬ者を味方に引入れて何の効かあらんと、侮り切つて居りますから何事も申しません、然るに今日桃太郎君が御入國と聞いて、一番に迎ひに出でたのはこの仁でございませう、人間は何うか斯ういふ工合に、他に心裡の知れぬやうな工合に致したいものでございませう、併し桃太郎殿の深き思召しを聞いて感心を致しました、何さまこの方は江戸表より親主公の内命に依つて歸國を致された御方であるナと斯う看破りしましたから、其處で自分は安心をして引取りました、それはさて措き島田辨之助でございませう、何うもこの桃太郎を國許に置いといては、片時安き思ひもならずと、そこで太田、土井の兩士に、如何いたせば好から

うやらと相談を致しました、すると二人の申しまするには「先づ兎も角も、海とも山とも付かぬうちに、逸急ッた事をして信られては相成らぬ、何とでもまた然るべき工夫もあれば、當分病氣届けを出して、屋敷に引籠る方宜しからん」どの事に、其處で島田は直ちに屋敷に引取り、お目附へ病氣届けを出しました、此方は玉井始め前田駿河守その他四五の忠臣、交るく、十一家の植木屋に訪れまして「恐れながら御前、此處に在しましては、薄氷を履むに均しき事にござ候ふゆゑ、何處にも御越してこれなきやうならば、手前の方より保護の者をば御側へ向けて附け置きたく存じまするが、如何な事にござりまするや」と伺ひますと、桃太郎殿は「イヤ捨て置け、その儀には決して及ばぬ、予がこの處にあれば、刺客の者を差向けるは、謀て覺悟の上、罷越せば取つて拜へ、それを吟味の手掛りと致すが

第一番である。〇、ハ、ツ、就きましては鏡の島田辨之助といへる者をば御呼出しになりまして、御吟味あつては如何でござりますか、桃太、イヤその事も大概承知は致して居れど、島田如きの小冠者、捨て置くとも苦しからぬ、それよりは重役のうちに取り調べたき者もあれば、その者より先に吟味を致す心底である。この一言を承り、忠臣の輩も皆々感心を致しました、どうもこの位な君でなければ、逆も御一名にて國許へ御歸りに相成り、御家の政治をば矯直さうというやうな事は出来ません、依つて強ひては申上げ兼ねましたから、鏡々はその儘引取りました、また御當主筑前守重教殿へこの事が聞かて参りますと、直に桃太郎を呼出し、御城内梅の御殿に於て面會を致される事に相成りました筑前ようこそ今回は歸國を致し呉れた、這回の家の騒動、予が保護をせんと戻つて呉れたであらう、過分に存する

江戸表に在します父君の仰せを棄つての事ならん桃太これはお兄上には御機嫌の体を拜し、恐悦至極に存じまする、これは極く密々の事にござりますれば、貴兄だけには申上げ置きます、江戸表に於て父君はよく御承知にござります、汝外子なれば、敢て其方の身に事あるとも、加賀の家に関る謂れはなく、神明佛陀に誓つて、兄重教殿の保護を致し呉れよと、内命を蒙り、悉く國許へ立歸りまする途中、圖らずも悪人を引提へ、大概國許の事共承知いたしました、御心安く思召されませうやう筑前ア、辱なう存する、予は何事も汝に後れ、我思慮の足らざるよりして、老年寄られし父君に對し、不孝の上もなきと、この上は萬事其方宜しく計ひ呉れるやう、就いては植木屋とやら座敷に居つては、萬事不都合であらうから、當城内に在つては如何である桃太御意にござります、その儀思はぬではござ

りませぬと、却つてこれでは宜しかるまじく、矢張り植木屋家太郎方に居ります方、至極都合と心得ます、筑前然らば其方の意に任すが好い、これより終夜酒宴を開かれて御話の末御歸りになりました、重教殿も最うこの年が三十二歳、桃太郎殿は十八歳、これだけ年齢の違ふ兄が、十八歳の桃太郎殿に手を置く位なでございますから、孫代不思議の名君といふ事は、ある家中の者は、誰れ一人も思はぬ者はございませぬ、その翌日に至りまして、直に當主重教殿より、領分一級へ觸を出され

ました
這般加賀少將殿江府表より四男久松桃太郎重政を以て、國許の藩政改革の爲め、差向けられ候間、何に依らず萬事重政の意に随ふべきものなり
享和三年癸亥三月十一日

久松桃太郎

といふ趣意の御觸が、加州領末々に至るまで、漏れなく廻りま
した、恚くて城外の咽喉出口入口先づ越前より加賀への街道筋
金澤よりは一里半野々市の固めには徳原勘六百名を引卒て備へ
を付けました、また能登より金澤へ這入る街道筋には、御城下
より四里離れます津幡には伴八彌百五十名を以て備へを付け
ました、これは何の爲めかと言いますと、自然富山より手を
廻して金澤の様子をば探りに来るやも區り難く、謀反の棟梁は
淡路守利幹と星を指しましたから、そこで自然商人が這入つて
來まして引捕へて何々の用向にて罷越したといふ事を取調へ
且つ品物は真込みあるなれば、その價金何程と當人に尋問ひ、
而してその先を取調へ、果して言葉通り帳簿が合ふ時は然るべ
き役人二人を添へて取引をさせるといふやうなとで、一ツ問違

松平筑前守重政判

久松桃太郎

へば忽ちその罪を糺すといふ、何から何まで干渉を致しますか
ら、一人も問者は這入る事は出来ませす、恚くて殿重に國許の
悪人をば取調へにか入りましたが、これ皆桃太郎殿の指圖で
さいます、然るに茲に彦三八番丁で四百石島田數馬といへるは
先回にも申し上げました通り、辨之助の肉身の兄でございます、
なれど、この仁弟辨之助とはその性質天地雲泥の違ひでござい
まして、飽くまでも忠心一圖の仁、苟且にも曲つた事はせず、
潔白な質でございます、這回桃太郎殿よりの御指圖に依つて、
領分一同へ出ました觸に、大きに胸を痛めました、時に二月の
十二日の夜の事でございませす、同じ五番丁の屋敷にある辨之
助は、當時病氣届けを出し、閉門ではございませせんが、表門は
閉ぢて、謹慎同様の身の上でございませす、數馬は裏門の耳門上
り迄と這入り數馬辨之助は居るか、中間はこれを見て中間これ

はか出で遊ばしませ、主人はか屋敷にござります、數馬、左衛門、か、數馬が參つたと傳へて呉りやれ中間、委細承知いたしました。そこで辨之助に慇懃と申入れますと、「然らばお兄上を此處へ御案内を申せ」難て數馬は案内に伴れられまして一室へ通りまするど、お茶煙草盆の用意をして、最と町率に扱ひました。暫し経つと辨之助は、小刀のまゝ出て參り、尤も長髪でございます辨之助これはい、お兄様でござりますか、數馬辨之助、今日兄が參つたは、餘の儀にあらず、誰れも他人は居らぬか、辨之助、誰れも居りは致しません、數馬、然うか、其方生れぬうちのことゆゑ知るまい、兄數馬も知らぬ事なれと聞傳へて居るとには、先々代の君五代宰相吉徳公の頃は、足輕大藏長次兵衛の侍長玄といへる者、吉徳公の御意に叶ひ、既に御手許まで出づる事となり、六月お墨堤の際に、毒藥を盛み置き、毒食の節、金相

鉄にその毒藥を入れ、膳部役人に毒見をさせて、立所に吐血をさせ、その毒藥見願しの功に依つて、御側役に立身をなし、その後浪人の者を誘ひ、密かに主公の御妾たる、江戸表は芝神明の神職、鎮木市正の娘お貞の方と不義をなし、その腹より出でたる清之助殿といへる君を以て、加州の御家横領させ、己れ後見となつて、永く榮華の春を見むと、謀りしとあり、其方も定めし聞傳へて居るであらう、その時この加州に於て種々様々の噂の立ちし事は、いま兄が云ふまでもなく、疎る子遣ふ子でさへも聞傳へての國許の騷動話、その時己れは立身なし、既に犀川の柳原にて、七千七十五石の食餘を辱なうし、長立改め大藏内藏頭となつて、その勢ひ鴻大もなく、時に己れが父大藏長次兵衛の弟大藏六左衛門といへる者、足輕ながら潔白なる者にして内藏の悪事をば聞知り、密かに參つて異見をせし事あり、然る

加州の分家上州甘藷郡七日市前田大和守殿、當時浪人天童
 郷右衛門といへる者あり、七日市を浪人してより、當加州城下
 に來り、手迹の指南を致して居りしを、武術に秀でたる事を知
 り、大槻内藏が懐刀と雇入れ、かねて屋敷に置きあるを、直
 ま叔父六左衛門の跡を尾けさし、道中に於て命を取らんと致し
 た事がある、幸ひにして六左衛門は、その危難を逃れ、遂に加
 賀國金澤を背後になし、永く山中に退き居りしが、後日大槻の
 反逆顛れて、家の忠臣星の如くに顯れ、悪人は罪せられ善人は
 賞され、既に一族の者といへど、六左衛門の如きは潔白なる者
 ゆゑ、後年に至つて呼返しとなり、加州の御創設として、今尙
 六左衛門の家のあるとは、其方も知り居るであらう、實にこの
 北國は、度々左様なる騒動あつて、畢竟國守頭職に居らるゝ
 がゆゑ、差して將軍家より御召めもこれなきといへど、贈代

大名であらうものなら、疾くに國替を命せられ、如何なる間違
 を惹起すやも圓り難き事である、ナ、相分つたか、這回重政公
 御入國なりしも、畢竟それ等これ等の悪事の金議をなされん爲
 の御歸國なり、其方知らずや、加州一同への這回の御觸、一方
 ならざる大事であるぞ、最うこれまで申したなれば、其方も分
 つて居るであらう、弟と思へばこそ兄が参つてこの意見は、眞
 や悪かに聞きなすなよ、この兄は父の家を相続して四百石、汝
 は汝の才を働かせて五百石、泰平の世に盛の上の立身、去りな
 がら兄は汝の立身を願はぬにはあらねど、御家に忠義を貫き、
 何處々々までも汝が腕先を以ち働いて立身をしたとか、勝たま
 九身命を擲つて君家の爲めに功を顯して立身をしたとならば、
 誠嬉ぶべき事にて、亡父の位牌にも満足を興へる事なれど、
 其方盛の上の立身はこの數馬は少しも喜ばぬ、遠き先通は伊

守我經公に仕へたる四天王の一人龜井六郎清繁の子孫、島田の
家名に傳の付かざるうち、切腹を致して相果てよ、兄が介錯を
致して取らせり、言はれて流石、悪人の島田辨之助も、氣も魂も
顛倒するばかり、揺がぬ兄の一言に、穢身熱湯の汗を流し、顔
色蒼腫めて両手を支へ辨之、驚き入つたるお兄様のお言葉、切
腹に辨之助恐れ入りましてござります、只今この場に於き、切
腹いたすは最易けれど、些か手前も望みのごさりますと、
開は餘の儀にあらす、只相果てまするに就きましては、死後檢
屍の役人方に、悪むべき奸賊といへど、死に臨んでは家の爲に
も相成るものを遣し置いたとの事あらば、少しは死後に至つて
不慮と思ひ下さる事であらうと存じます、切めてものごと、
今宵のうちに家の大事を一々に認め置き、明朝未明を待ちまし
て、潔よく切腹を致して相果てまする心底にござります、死後

檢屍の役人より、大奥へ向けて届けられたる際は、お兄様、
然るべきやう御計ひの程をお願ひ申し置きます、數馬、ハ、ウ、
然らば得心いたしたか辨之、心得ましてござります、數馬、ハ、ウ、
之助、盗みする子は憎なうて、經取る人が怨めしいとは、世の
諺にもいふ通り、現在兄が弟に、切腹を致せと教へるとは、
酷も亦無慈悲の至り、先祖累代の家名を汚すまいと思へばこ
そ、死を以て詫をせよとは、よくくのと、察して呉れよ」と
言ひながら落來る涙を袖にて拭ひました、辨之、委細承知いたしま
してござります、左様なればお兄様、數馬、弟、辨之、先づお茶なり
と召喚つて下さりませ、數馬、イヤ茶も何も入らぬ、心靜かに死後
の笑ひを受けざるやう致して呉れよ、辨之、最早お歸りでござりま
すか、數馬、ハ、直に數馬は賸物を提げ、裏玄關へかゝらうと致
します、辨之助は送つて出でまして、辨之、左様ござればお兄様

数馬「オウ」と言つた儘で、背後振向きもせず、数馬は裏門より出て行きました。太息を吐いて辨之助は、元の居室に戻り、両手を膝に突いたまゝ辨之助、邪魔になるのは兄貴の数馬、こりやア生かしては置けぬわい」と言葉の切目を待って、唐紙を開け両手を突き、○島田氏辨之助、貴殿は神戸か○、この者は播州姫路の城主十五万石酒井雅業頭の藩士、當時浪人神戸源三郎といへる者でございます、一流の奥義を極め、武術修行の爲めに、この北國に來り、圖らずも榎田の遊廓に於て、一婦の爲めに心を奪はれ、身体窮迫の折柄、辨之助の負債を償ひ、情けをかけて伴歸り、自分の懐刀として、屋敷に置いてある曲者でございませす、依つて辨之助は直ちに手許にありし一刀を差出し辨之助の神戸、これを興へる、貴殿これより跡追若いて源三郎や御貴殿の兄上数馬殿と辨之助の見事やつて呉れ源三郎心

得ました」と直に目釘を濡し、腰刀を合はせまして「御免」と云ふなりその坐を起ち、数馬の跡を追行きました、此方は数馬五番丁の屋敷を出で、八番丁の我屋敷へ歸道、数馬ア、月は光々、牙は渡り、心持は清々しけれど、心の暗の暗れ固なく、何か首尾よう辨之助が、切腹いたして呉れよば好いが」と獨語を云ひながら來かゝる折柄、「数馬殿の」と背後の方に聲あつて、頸りと叫び止めますから、何者ならんと振向く所へ、足を疾めてハタハタと、手許へ向けて駈來りました源三郎島田辨之助の家來源三郎にござります数馬へ、ア、何を動か源三郎お忘物が数馬よ、懐中に紙入りあり、腰に印籠あり、何も忘れし物はないやうに思ふが源三郎イヤ御所持品ではござりません、主人辨之助より貴殿へお渡し申す品物、数馬よ、ウ然うか、アレ」と背後を振向き、左の手を出します折柄此方は振打ちに、ヤツと

云ひささ斬込む白刃、此は狼藉と身を隠し、右手を以て柄に手をかけ、抜合はさんと致しました。些か後れて肩口を斬下り、三郎、二の太刀に數馬をば斬殺さんとする折しも、片傍の端よりスット被り、雲突くばかりの大の男、物をも云はず野出で、神戶源三郎の利腕を捕へ、ヤツと云ひさま帯に手をかけて、身を宙に引揚げ、頓顛倒と大地に投着け、甲數馬殿、此處構はずと屋敷に引取り、傷口の手當を致されよ、跡は拙者が引受け申した、と言ひつゝ忽ち下緒を取つて、神戶源三郎を高手小手に捕上げ、ヤツとばかりに、引揚げたる素係は、何人でございませうか、一息いたしまして申上げます。

第七回

この仁は城下長町の屋敷にて、食膳は二百石、八島流といふ武術の達人、八島安藏といふ仁でございませぬ、これは先年島田辨之助の爲めに失敗を取り、恥辱を受けた事がございませぬ、なれど、それ等の事は決して遺恨に思ふやうな仁ではございませぬ、が、彼奴等外面には柔和なる体を見せ、内面に邪を含み居る曲者が、御家に仇をなす奴と見ましたから、機もあらば彼奴が、悪事を許さ、御家の安堵を圖らんと、かねて附けつ廻しつ致して居りました、然るに今宵圖らずも、現在己れの兄たる數馬を、他手を以て殺害に及ぼしたるは、これ何れの手掛りなり、幸ひ若君十一家の里に在しますから、桃太郎殿にこの事をば申上げんと、神戶を引揚げ、植木屋宗太郎方へ出掛けて参りました、夜中ながらこの事を申入れますと、宗太郎は致して、庭前へ家内を致

しました 寅蔵して若君は如何召された 宗太未だ御書見をばなされ
れて居ります 寅蔵何うか拙者の参つた事を傳へて呉れ 宗太心得
ましたと 早速重政殿へこの趣を申しますと、桃太郎殿は障
子を開け「近うく」どの仰せに寅蔵は「ハ、ハ、ハ、八島寅蔵に
ござります 桃太、寅蔵、今晚新様々々の次第にて、辨之助めが
兄數馬をばこの者の手を以ち、殺害に及ばんと致しました、か
るがゆゑに取敢ず此奴を縛上げ、伴参りましてござります、こ
の場に於て拷問にかければ、必定口を上げるに相違あるまいと
存じまするから、此處にて吟味を仕りませうか 桃太、ハ、ハ、天晴
れなる其方の便さ、なれど、予は大概悪事の儀も心得居れば、
斯様な端下を一人ぐらゐる白狀させたとごるが、左して何うとい
ふ事もない、最早残らずの事は分つて居るわい、依つてこの者
は其方に預け置くから伴歸り遊さぬやうに預け置け 寅蔵委細心

得ましてござります」とこれから寅蔵は神戸源三郎を、我屋敷
に伴歸り、手足の關節を外し、食物を與へて、命を繋がせ、自
分の屋敷に留り置きました、ところで數馬は屋敷に歸つて、直
さま醫者を呼んで治療を施しました、輕傷のとゆゑ、一命に
別傷はございせん、また辨之助は源三郎が立歸りませんから
兄の程も分らず、只源三郎のみの事に心をば苦しめて居ります
る「さては頼み少なき派人者ゆゑ、思ひを達する事のならざる
より、此方に合はす面がないと、その場から逐電でもしたも
であらう」と心得居りました、然るに薄々話を聞けば、長町の
八島の屋敷に、縛めを受けて居るとの事でござりますから「此
は大變、虎藏と拙者とは、言はず語らず不和の間柄、殊に彼れ
は生來偏屈の質にして、太田、土井などとは無論論も合はず、
此は著しき事の出來いたした」と非常に心配を致し始めました

併し羅漢中の事なれば、表向き何う新うといふ奔走もならず、夜中密かに屋敷を抜出で、太田筑後守方を訪れ、この旨を新くと告げますれば、筑後守方は容易ならぬ事である、この上は久松桃太郎をば亡きものにして、了はんければ、日頃の思ひを達する事もならず、却つて我身の害を惹出す甚、鬼やせん角や」と一味の曲者を集め、密かに談じる事になりました、この頃味階町稻荷橋の屋敷に粟宮主水といふ四千石取りの重役、この者方に食客をして居ります伊賀の上野と伊勢國兩城兼帯三十二万部左近といへる者、この地に参つて圖らずも粟宮方の食客となり、かねて伊賀流の忍術に長け居る事を承知いたして居りますから、この者を招き、刺客に差向けるといふ事に一決いたしました、そこで宮部を呼寄せまして、太田、土井、粟宮の如き重

役の者やら、云々計ひ呉れよと、依頼に及びますると左近、開は何より心易き事と、か受合ひ申すべき筈なれど、部屋住無縁の身にあらるよといへど、假りにも百有餘万石國守願の加賀家の御公達、拙者確かに受合ひ、乾度一命を取るといふ断言は致し兼ねる事にござります、得て術の失敗るといふ事もござりますから、それ忍術といへるものは、人皇五十六代清和天皇の御宇貞觀三年辛巳の三月、六孫王經基が家臣紀有常といへる者、主従五人にて、陸奥の傍に出でし際、奥州は黒川郡岩手山の麓中仙寺村の善太夫といへる者方に一泊をなせしに、その家の家内は、南蠻國より割舟に載せられて流され我朝に來り、既に一命も危き所を、善太夫に助けられ、遂に同人の妻となり居り、この者が一の妖術といふものを行ふ、なれど民家にあつて、必要ならざる事なれば、別段その術を施す事もなく、空しくその儘

久松桃太郎

に捨て置いたるところ、
歸つて、主君經基卿にこの旨を申上げたるところ、御所に突聞
奉る、何さま必要なる事といへど、妄りにこれを傳ふると
と、この事極く密々にて、上の方で御學びになりました、
後に至つて追々弘まり、右有常に隨行したる輩の者共、石川小
文吾、百知三左衛門、大枝那木新九郎、甲斐作左衛門、この四
名の者の子孫に追々傳るととなり、既に石川、百知の如きは、
後伊賀國にその流名を遺し、これ伊賀流と稱ふ、また甲斐作左
衛門の子孫は、若州にあつてこれを弘む、これを甲斐流といふ
また大枝那木新九郎も子孫に傳へ、信濃國にひろめ、子孫信州
伊奈郡真田に止まつて、真田信濃守棟綱の流中にこれを傳へ、
後この流義を真田流といふ、併し追々日本に弘まつて、補正
成の家來には板持三郎を始め二十八人、忍術に勝れたる者、

久松桃太郎

の味方にあり、また後々に至り、真田が子孫に追々傳へり、幸
村の代となり、穴山小助、猿飛佐助などといふ、忍術の名人出
でたり、併しこれ等の人は、何れもその奥義を極めし忍術の名
人、吾れ等は修業中の者に候へば、自然遺損はんもはかられず
倘し然ある時は、甚だ申譯なき次第、併しお頼みの旨、委細承
知いたしましてござりますが、直ちに事は計ひ懸う存じます
ゆゑ、何れ機会を見合はして参る事に致しませう、筑後、然らば好
きに計ひ呉れるやう、どの頼みに依つて、遂にその夜はこれに
て別れる事になりました、さてお話かはつてその年三月三日と
なりました、桃の節句や雛祭り、里人も祝ふて遊ぶに引替へ
桃太郎殿は書物に眼をさらし、一心雜めたる讀書の聲、その夜
も彼れ此れ亥の刻過ぎ、未だ寝もやらすして、書見をして居ら
れます、此方は宮部左近でございませうが、驟て用意の裝束を

久松桃太郎

身に纏ひました。が、なかく忍術の法といふものは、
木綿一疋を女の不淨にて染り、それにて焚き束を
當今ではよくこの帽子なせにして被ります。彼の
物の皮で造りました。その頭巾を被り、跡の身を丸
を袋となし、腰に提げ、その中に二十日鼠を入れて、
居るや又は寝静まりしやを探らん爲め、その鼠を走
事もあり、家に取りましては物を噛んで始末にいけ
ございませぬが、何かにつけて二十日鼠は忍術家
見ぬます。さて、十一家の里植木屋宗太郎の裏口
をかけ、密かに忍込みました。一刀の鞘は黒塗り柄
何糸にて巻かせ、残らず目に立たぬやうに致すの
の法ださうでございませぬ、密かに飛石傳ひに桃太
向けて近寄つて参ります。未だ御寝みもなく、

久松桃太郎

て居られます。密と背後へ廻り、一刀スツリと
を組つて、腰と諸共、斬込ひ途端に、桃太郎殿は
早くも宮部の足首捉つて、トンとばかりに投着け
残念仕損じたかと、身を脱けども、奈何ともすべ
苦しみ居ります。折振、宮部を膝の下に取つて敷
る燈火を引寄せ、頭巾を脱がして顔を改め、腰の
ヲと其處へ投出し、桃太「行け」と仰せられました。
言はれずに行けば、此方も途方に暮れ、致方がござ
ません。流石の宮部も困り果てまして、左近ハ、ツ、
る御名君、卒さ御存分に」と首を差伸べました。桃
入る時は、源人もこれを撃たずとやら、吾見の妨げ
はや立去れよ、左近ハ、ツ、流石は加賀家の御公達、
のその一言、其食は樹を見て、菓を組み、名士は君を

久松桃太郎

といふ、下敷如きの中々及びも付かねところ、今より君の御心に
に随ひ、天晴れ忠勤を願みたく、何卒御許し下し置かれませう
なれば、有難う存じ奉ります。桃太、イヤ身は部屋住、家來を抱へ
るの餘力もなく、またく時節もあらん、兎も角今番は疾く立
歸れ」と仰せられました。此處等は、大膽なものでございませ
尋常普通の者でございしたら、誰れに頼まれて出て参つた、
如何いふ譯で予を殺しに來たと、問はねばならぬ所でございま
す、なれば、こんな事くらゐは物の數とも思ひません、斯様な
事が百度あるとも、ヒクともなざるやうな君ではございませ
流石の宮部も恐縮なし、惜々として立歸りました。愠くて太田
を始め一同の者に向ひ、十一家の植木屋方に忍込み、桃太郎殿
の爲りに取押へられ、將たまた斯く、新様に仰せられたと、
ありしその儘具さに歸りました。其處で舌を巻き膝を打つて桃

久松桃太郎

太郎の大膽に悪人共一同は驚きました。然もこの有様では中
々桃太郎を容身に襲取る事はならざるゆゑ、兎せん角せんと、
種々工夫に及びました。この宮部左近といふ者は、これより
如何なる事を爲出しますか、悪人方に在つて、忠臣の者に心を
當せるといふ、これ軍學で申す、韓信背水の備へといひ、敵を
以て己れの味方とし、却つて敵を破らせるといふ工夫でござい
ます、智略の程は恐れ入つたものでございませ、さて太田、土
井の者共も、實に桃太郎には手が着けられませ、學力といひ
武藝といひ、堂々たるべき所の大將候方の公道にも、またある
まじき重政殿でございませ、この仁に關るといふは、大い
に及ばざると、これは一ト工夫考へ直して、當主重政殿より先
に亡きものにせんといふ所へ目を着け、その計ひに及びました
然るに當時城下屏川の片町に住居をなす町番者にて、高橋良庵

久松桃太郎

といふ者がございました、醫者は相當に巧者な醫者でございま
す、悲しい事には一人の母を抱へ、貧乏の爲めに身を結まれて、
大いに迷惑を致して居ります、とこの場でこの良處を密かに呼
寄せ、段々と重役の者が打寄り、毒薬調合の價をば申付けまし
た、貧乏は諸道の妨げとやら申しまして、いまこの場に於て毒薬
を調合さへすれば、進かに事成就の後には、三百石の知行を與へ
御典藥に取立て、當金百兩進すからといふ頼みでございます、
良處は假令後の出世は兎も角、今この場で百兩の金を儲ければ、
何程か自分も用足り、打撲いての貧に迫り、困難の折柄ゆゑ
不圖其處に心を盡かしました、誤積しい事にございます、そ
こで毒薬調合を致しましたが、これは逆も服ますといふ事は出
来ません、立所に命を失ふ位な毒薬を服さうと言つて、町
人など事變り、大名方には御毒見といふ者が付きます、

久松桃太郎

茶一服だに自から酔て、召喚るといふ事はないものでございま
すから、中々服ます事は出来ません、そこでこれは筆の命毛に
向けて含ませ置けば、必らず主君は御痲痺の強き御性質ゆゑ、
筆を噛みなさるのは日頃のと、これ御強の手段なりと、それぞ
れ工夫に及びました、醫者は只毒薬を調合ただけで、何うして
用ゐるといふ事は知りません、が、悪人の方にして見れば、用
方は色々と考へ、慥くは計ひました、併しこの毒薬を施します
方には、餘程難しうございます、筑前守重教公の御側には、玉
井市之進といふ、彼の忠臣玉井市正の舍弟が、片時離れず保護
して居りました、この仁また文武兩道の達人にして、行路衆人
に勝れ、容易に主君の手許へ悪人の寄付く事は思ひも依らぬ事
でございます、機もあらばと、晝夜の別らなく、肺用を研いて
考へ居ります、兎角思ふに任せません、茲にまた十一家の

久松桃太郎

宅に御在である重政殿の御考へでは、兎に角重役を集めて評議の上、深見將監を能州島の路から、迎取らぬ事に於ては、確かな所が相分らぬ、學校の事柄から、總て出火の模様、これ等の所を細密に調べんには、將監を呼戻し、この者より逐一に聞取らうといふ御考へでございますから、其處で重政殿は一同の者を集めて、如何したものであらうかと、御相談になりますると不破彦三は進出でまして彦三これは御苦勞ながら玉井市正殿が合弟市之進殿を以て迎取らせませんければ、尋常普通の者では途中の程も心元なく、开は將監戻る時は、太田、土井の如き者が餘程の妨げ、深見の言葉に依つては、立所に悪事の露顯するを厭ひ、途中如何なる處に待伏いたし、將監の一命を断たんも圖り難く、依つて玉井市之進殿ならば、この役目は此度相勤めらるであらうと思はれまする桃太郎、何さま有理なる所である

久松桃太郎

が、彼れを遣すと致さば、兄重政殿は何程か御心痛を致されるであらう彦三ハ、ア、开は吾々、御役には相立ちませぬぞ、入代り立更り御儀にあつて保護を仕るとにござります桃太郎、然らばこれより直ちに市之進をば呼寄せよ」と仰せられました其處で兄市正より書面を以て、直ちに十一家の里に出張いたすべき旨を申遣しましたから、この段を市之進より主君へ御伺ひを致しますると、重政殿も彼れ此れは申されません、直ちに御許しになりました、すると市之進は十一家に来つて若君に面會を致し、始終の事柄を承り御請をなして、直ちにその場より身支度の上、能登の島の路へ將監を迎ひに出ました、先づこれに少しく安堵の形、將監戻らば早速調べに取掛らんと、老職の者ども申合はせ、その日は酒肴の用意をさせ、一盞酌交しとなり、銘々夕方に至つて引取りましたが、桃太郎殿は只一人、

その場に御残り遊ばして、兎やせまじ角やせまじと、机に倚り、種々這回の件に付き、考へて御在でなさいませうら、次第々々に夜も明け渡り、障子を開けて空を眺め桃太郎、思はず時刻を移したわい、星の様子では亥の半刻、ドレ臥房に入らんと御立ち遊ばさうとする折柄、庭の石燈籠にカチツと石が當りましたから、立止まつて様子を御覧になりませうところへ、手早く塀を乗越し、黒装束打扮の者一人、庭前へ飛下りましたが此方に向ひ兩手を支へ「ハ、ツ、若様にござりまするか桃太郎、汝は宮部であるか左近御意にござりまするか桃太郎何事である左近ハ、何御用にて今日玉井殿をば御呼寄せに相成りましたか、未だ御城内へは御歸りにはなりませんが桃太郎、市之進には少々用向あつて遠足をさせた左近此は若しき大事にござります太田土井の兩名より、犀川片町の高橋良庵いとふ醫者をかた

らひ、毒薬を調へ、主君の御机にこれある筆の命毛に、その毒薬を仕込ませました、斯く申しませうらちも心元なく、就きましてはこれなる所の一書は、悪人残らずの連判状の寫しにござりますれば、御覽に入れ奉ります桃太郎、出来した左近桃太郎世に出づる事もあらば、末は主従ぢやぞ左近ハ、ツ、野なう存じ奉ります、尙この上にも秘密を探り、乾度御知らせ申上ぐるでござります、御免」とその儘宮部は立去りました、跡に桃太郎殿は、この書付を開き、燈火の側にて逐一御覽になりまする、總て重役又は下役等合はせて、重立つたる者六十八名初筆には富山の淡路守利幹、並びにお静の方、木田半之丞、これには静の親父にござります、太田土井は言ふも更なり、その他栗宮、松田、小幡の如き、皆一騎當千の重役ばかりでござりますから、此は大變なりと、忽ち料紙を取寄せて、越前奉書へ

久松桃太郎

「サ、く」と御記し遊ばし桃太郎は居らぬか宗太、ハ、ハ、桃太郎
汝大儀ながら彦三一番町へ罷越し、この書面を不破彦三へ直接
遣し呉れよ宗太委細承知仕りましてござります桃太郎身はこれよ
り金澤城内へ懸着け、お兄様の御側へ罷越さん、頼いて彦三
にも参り呉れるやうと申し置け、是に於て直ちに宗太郎は一刀
積たへ、右の書状を携へ、不破の屋敷へ懸着け、夜中ながらこ
の庭を申入れました、不破は大儀であつたと言ふより早く、寝
衣の上に上下を着け、大小刀取つて振舞ひ彦三、不破の家來馬牽
け「……」ユラリヤングと打降り、槍を小腰に差込み、眞一文
字に金澤城へ乗出しました、然るに桃太郎殿は逸疾く、信儀だ
に手許にございせんから、御徒歩にて金澤城へ夜中の御登城
實に玄關番及び執次の者までも、驚くと大方ならず、大奥に來
れば此は如何に、はや重敷公は毒薬に御中り遊ばして、

久松桃太郎

主は鳥鷲々々犀角をば削らんとして、指を削つて泣出すあり、
何よ發よと、只途方に暮れて居ります、折柄重政殿は御手許
に参りますなり桃太郎、格事の折柄、途方に暮れるとは何
事である、白猿の生肝を持参れ坊主、ハ、ハ」と答へてお坊主は
忽ち白猿の生肝を持つて参りました、これは何故かといふと、
五代宰相吉徳公は、至つて御逆上性で、一ツ間途うて瘡が立
ますると、頻りに逆上のうへ、鼻血が出る質でございしました、
其處で加賀の名醫が、常に白猿の生肝を御手許を揉さるやう
御所持あつて、御逆上の時は、これを鼻に御當てがひに相成る
と、立所に血が治まりますから、御忘れなく御用あるやうと
この事を御勧め申上げました、そこで至つて瘡の強い御方では
ございしましたが、こればかりは、身の御幸いには替へられませ
んから、片時離さず御所持あそばしました、依つて加州の御家

督の君は何時もこの生肝を腕に備付けてございました、早速これ
れを桃太郎殿は御取出しに相成りまして桃太郎兄様、重政で
ござります筑前オ、オ、……」とはや悶り苦しき時、出
る息ばかりで引く息は稀れでございます、桃太郎殿は背後より
抱きながら、左の手で主公の鳩尾を抑へ、右の手にて生肝を鼻
に當てがひますると、吐かんとする血を止めますから、暫時は
御一命に別條はございませぬ、その苦しきと一方ならず、折柄
逆しく駈着け参ッたる不破彦三「ハ、ハ、ハ、若君にござりますか
桃太郎ウ不破、大儀であつた彦三してこの椿事は……桃太郎大儀
ながら椿へ上つて、非常の太鼓をかけ、早々一同の者に知らせ
よ、その他新しく、新様に取計へい」と何か御吩咐けになりま
した「心得ましてござります」と不破彦三は、袴の股立取上げ
て、行きなり城の松に上り、左手を腰に突張り、右手に旗を取

つて腰を併し、亂拍子をかけました、太鼓の音は山を越し、法
眼貝の音は山を劈くといふ軍器でございまして、素より金鼓、
遠音をさしてド、ド、と鳴響きます、家中の一同此は一大事
と、取る物も取敢ず、何れも寝衣のまま馬に打乗り、二三の家
來を引連れて、武器の類を用意させ、馬提燈を腰に穿し、勢ひ
込んで駈参り、土煙を蹴立て、總登城でござります、追々大奥
へ罷越し、主君の一大事を見て、驚かぬ者もなく、この時第一
悉に臨着けましたは、今井田内記にござります、常日頃懸當な
仁に似合はず、兩眼血走らせ、ハ、と手を突き、御挨拶を申上
げますると重政公は苦しき息を吐くばかり桃太郎本さお兄様、
御遠言を遊ばしまするやう筑前、……」お裏方始めか
表の忠臣も、誰れか一人として兩眼に涙を浮めざる者なく、こ
の時常日頃坐懸つて居るか起きて居るか分らぬやうな今井田内

久松桃太郎

記は大音に内記各々方、涙に咽ふは道理にこそ聞ゆれど、只今御家の一大事、御遺言でござるが、内記筆記を仕る、隠んで承られ上、この一層に願まされて、出づる涙も引込んで仕舞ひ皆々レインと致しました内記坊主、料紙々々坊主、ハ、ツ、今井田内記は筆を執り、御臨終の際何處の方を向きたまひ、桃太郎君御背後より新様に致され、第一番の御發言はと筆を執りました、この時重政公は、苦しき息のそのうちより筑前加賀の家督は、舎弟桃之助を以て、相續をさせるやう内記ハ、ツ、筑前次に悪むべきは富山の淡路ぢやを内記ハ、ツ、筑前家の仇もや、内記御有理にござります筑前無念だ……」と仰せられも息苦しく筑前總て後見は、重政に申聞けよ、弟、弟、桃太ハ、ツ、筑前敵を討てよ」と仰せられますと、桃太郎殿は兩眼に涙を一杯に浮め桃太お兄イ様必らず御無念のはと重政お膝させ申します

久松桃太郎

る事にござります筑前ハ、ツ、……」と二言仰せられ、莞爾と御笑ひになるかと思へば、敢なや息はコトリと切れました時に吾妻障子一重外面に、肥州から御興入に相成りし奥方政姫君を始めと致し、その他御附の女中一同、ワツとばかりに哭聲暗しく、重政殿大音を揚げ桃太只今主君御臨終なり、哭きたまふとは異途の妨げ、喧噪しい」と仰せられました、流石は加州の公達、鶴の一聲、皆々は袂を唾へて聲を潜めました桃太不破は居らぬか彦三ハ、ツ、桃太彦三、大儀であつた、これなる一書を以て、大手搦手を手配に及べ、取る手おそしと不破彦三ハ、ツ、と讀下し彦三心得ましてござります、戸田十郎左衛門殿は居らすや、山崎六左衛門殿は居らすや、兩人ハ、ツ、彦三各々大手搦手の間を守り、新様々々に致されよ兩人心得まして候ふなり、何思ひけん玉井市正には、玄關に駈出で市正玉井の家來は

居らすや家來、ハ、ツ市正馬牽け、直さま馬に打乗り、透目散に城内を駈出ししました、時に大尻谷と申すは、この御城の直側にてございませうが、これにお屋敷のございませう、太田筑後守、先刻より氣にはなッて居りまするが、妙なるもので、己れの身に覺事のある事は、氣が咎めて、倘しや夜中に駈出して、如何なる事の出来せんも圖り難しと案じまして、夜の明けけるまで差控へて居りましたが、はや東雲と相成れば、家來を引伴れて登城をせんと、表門へかゝらんとする、早くも先手は鐵砲備へ、續いて槍組、後は抜刀鎖帷子火事裝束白星の打ッたる兜を頭に戴き馬の平首に槍を押當て、大手を固めしは加州の指南番戸田十郎左衛門、老年ながら天晴れの達人、十郎筑後守殿、御登城は相成り申さぬ、お控へなさい、重政公より御殿命でござる、強ひて通らんとあれば、十郎左衛門立所に一命を絶たん、強ッて抵抗

爲召さるか、如何でござる」と吃止められましたから、已む事を得ず引取るとなりました、搦手より土井伊豫守、これも同じく馬にて駈着け参れば、山崎六左衛門同じく大手同様なる備へにございまして、六左重政公の御殿命でござる、隠んで閉門いたされよ、強ッて通らんとあらば、重役とは言はさぬ、立所に一命を申受ける」とハッとしてばかりに身搦へ致しましたから、これまた已むを得ず、空しく屋敷へ引取りました、總て六十八名の者、一名も登城はなりません、此方は玉井市正、これから毒藥の根本を取調へにかゝらうといふ一段。

第八回

さて玉井市正は、高岡町の木田半之丞の表門に來ッて、様子を探らんとて、駈けて参ります折柄、背後の方より「オ、イ、

久松桃太郎

オーイ」と聲をかけ、息急ぎ馳來る一人の者がございます、馬
上ながら振向いて御覽になりまします、最早六十の外へも出た
かと思ふばかりの老婆、左して昇しからざる姿にて、草履も穿
かず、既足のまゝ、老婆、暫時お待ち下さりますせ、お見受け申すに、
貴下様は御當家の御家老様ではござりませんか市正如何にも身
は玉井と申す者であるが、何事ぢや老婆、妾は屏川の片町高橋良
庵といへる者の母にござります市正、それが如何いたした
老婆、何か先達ちまして太田筑後様、土井伊豫様の御兩名から、
悴良庵をばお招きに相成り、お伺ひ申して後、立歸つて悴が申
しまするには、母人、遠からずあなたもお喜ばせ申す事がござ
いますと、宛も嬉し氣に悴が話を致して居りました、とこそが
今朝俄かに高岡町の木田半之丞様といへるがお出でになりました
て、何か悴と二首三首お話があつたやうに心得て居りました、

久松桃太郎

その際妾は厠に這入つて居りましたが市正、成程老婆ア、一
つと悴の聲、忽ち半之丞様の、血の垂る刃を提げなされ、被
方此方と宅のうちをお探しになりました、妾は恐ろしさに只息
を壓して厠に隠れて居りました、暫時経つと戶外の方へお出ま
しの足音が致しましたから、恐るゝ出て見ますれば、哀れや
悴は血汐に染み、實に情けなき無惨の殺し方でござります、取
敢ずこの事を注進仕らんと、今井田様のお屋敷へ罷越し、お願
ひ申さうと存じますれば、今朝は御上に至急の御用あり御登城
に相成つて、未だお歸りがなないどの御家來のお答へ、それが爲
めに如何いたさんと存じ、此處まで出掛けて参りましたるとこ
ろ、必定御家老様とお見受け申しましたから、失禮を願ひませ
ず、御用の際をお止め申し、恐れ入りましたる事でござります
何卒悴の仇をお報ひ下されましますやうお願ひでござります市正

久松桃天郎

ヲ、ウ左様か、ア、コリヤ重蔵、汝これなる老婆を身が屋敷へ
 伴歸り置け重蔵ハ、ツ市正吾れはこれより一人にて宜しい、ヤ
 ア、松藏は居らぬか松藏ハ、ツ市正この馬を牽け、駈て馬よ
 り下りまして、その儘高岡町の藪中木田半之丞の屋敷の表門へ
 かゝつて参りましたが、此方に立止まり、相待ち居るとは露知
 らず、半之丞は杖を突きながら、我屋敷へ向けて戻つて参りま
 した、何心なく今門より這入らうと致しますと、此方におつて
 玉井は、ツカ、と進出で市正ヤア御家の奸賊木田半之丞、玉
 井これに在り、卒さ尋常に腕廻せ、敵對いたせば立所に取つて
 押へる、如何である」と流石は重役の勢ひを以て、權柄押しに
 言はれた時に、老年といひ前後の辨別もあり、殊に大膽不敵の
 半之丞でございませすが、他の者なら、家來ながらも富山の領主
 利幹殿の爲めには、祖父に當りまする半之丞、何どか彼れ此れ

久 藤 太 郎

も申しませうなれど、加州家に於て、家老の中の四天王と稱へ
 られる玉井に出會ひましたとゆゑ、一言も云ふこと能はず、
 何の用捨もあらばこそ、
 に傷持つ半之座、顔色蒼腫りるを、白髭町の我屋敷へ引併れて
 ち下緒を取つて、高手小手に縛り、
 お歸りになりました、その足で直ちにお調へになるかといへば
 決して調へはとさいません、只殿しく薄めて置くだけのとてと
 さいます、急ぐて御葬式までのうちは、町々への觸は、上よ
 御沙汰これあるまでのうち、炭火を以て焚火をなし、焚火は禁
 ずるとのと、且つまた市中見廻りとして、幕政之進、藤田左衛
 門の兩名が、各々百名づゝの人数を引卒て左右に分れ、殿重に
 市中の見廻りを致しまする、また桃太郎殿御在である十一家の
 里の出入口二ヶ所は、加藤三郎左衛門、湯原平馬の兩名に、
 五十名づゝを付け、二手に分れて、出入を殿重に固めるとにな

久松桃太郎

り、いよく三月十四日を以て、假りの御葬式を相済ませ置き、御家督の君相定まり候ふ上は、野田村の大塚寺へ御本葬を致すべき手順にございます、とてころが同じ月の十八日、玉井市之進は深見將監、富澤清大夫を伴ひ、能登の島より戻つて参り、身をもふるはせて、思はずも無念の涙に暮れ、些かな御御手附を離れ居りしうち、悪人の爲りに御傷しや御落命を遊ばされしか、無念の至りなりと、玉井市之進は遺恨やる方なきとにございます、が、慙くて果てざるとなれば、その儘時節を察うて居ります、然るに今井田内記、玉井市正の兩名、此日公事場に出席なし、島田耕之助を呼出しました、病氣と偽り出頭いたしません、これに由つてその夜十一家の里に難越し、桃太郎殿に面會となし、兩名より申出でました内記、早深見將監も能州島

久松桃太郎

の路より、市之進殿迎取られて、金澤城へ立廻られ、不破彦三殿の屋敷に罷り居りますとのと、かるがゆゑに我君公事場に御出であつて、上の御威勢を以ち、醫者を差向け、容体をば癒せ候はせ、その上辨之助血病とあるなれば、彼れを擁抱り、附合せの御吟味あつては如何にござりますか」と尋ねますると、桃太「イヤ、捨て置け、深見は舊老臣の者である、島田は取るに足らざる値儀、彼れ等如きは重政の目より見る時は、昨夜生れた犬の子同様の奴、鬼に角子に考へもあれば、明日は大儀ながら老臣一同の者に申傳へ、午刻後より予が許へ出願いたし呉れるやう計うて呉りやれ、兩人へ、安綱承知仕りましてござります、何分名君の御せ、何れも機應變の御計ひを致されるに相違ないと思ひましたから、今井田、玉井の兩名は、早立歸り、家来を以て老職の者共へこの趣を申傳へました、さ

て翌日と相成れば、刻限違はず正午過ぎより、吾れもくど支
度を致し、皆十一家の植木屋へ集りました、先づ茶などを御出
しに相成り、桃太、さて一同の者、今日呼立て、實に氣の毒であ
たが、各々の存寄りを聞きたい、無論深見將監を呼返すまでも
なく、島田辨之助といへる者、好悪なる奴といふ事は、素より
重政承知いたして居る、通回家督の君重政殿不慮の御逝去とな
りし次第も、皆彼れ等の爲せる業、皆々仰せの通り吾々共もその
如く相心得ます、桃太と申して、彼れを呼出さんとすれば、虚
病を申して出頭いたさず、醫者を差向ける程の重役と申すにも
あらず、取るに足らざる奴、餘り此方より仰々しく申せば、何
か物に恐るゝやうにも相替る、依つて予は自から彼れが肝に近
々のうちに罷越し、取調べるであらう、○アイヤ、醫進を差向
けるさへ仰々しいどの仰せもこれあるに、若君の御身として、

自から御出でとは、餘り輕々しき事のやう存じます、桃太イヤ
然うでない、身が勤れば有無を言はせずその場にあつて吟味を
致す、加州の公事場、陸奥の問注所といへば、堂々たる一國守
といへど、引寄せて取調へ得られる位ぬの所、彼れ等如き者を
公事場へ引寄せ、るまでには及ばぬ、假令老臣の者といへど、知
行の高下に拘らず、當家に事へる限りは、犬鷹共に朋輩といふ
心よりして、病氣と申立て参らぬのであらう、予は無縁といへ
ど加賀家の血統、自から勤りなば、有無を言はさず取つて押へ
て調ふるは最と易き事である、予は自から参るぞ」と大音に仰
せられました、この時前田駿河守は「恐れながら若君の仰せに
はござります、すれど、壁に耳ある世のならひ……桃太イヤ苦しう
ない、何者が聞き居つても、そのやうな事に恐るゝ重政ではな
い、わい」一國の家老は「御名君にはあらるゝなれど、御若年ゆ

久松桃太郎

御寝みにならうと致す折しも、雨戸へ向けて知らせの飛脚、桃太郎殿は戸を開けて庭前を見渡し、折柄左近若君、宮部にござります桃太郎、何事ぢや左近今日御前には何ゆゑ彼の島田の許へ乗込むといふ事を仰せられましたか桃太郎何者かその事を通じたのであるか左近かねて當家に入込み植木造りとなつて居りました源吉といへる者、彼れは島田の聞者にとさります桃太郎、その儀は予も疾く承知いたして居る、最早悪人共の耳に遣入つたのか左近只今一同大尻谷筑後の屋敷に打寄つて、それ〱評定にとさります桃太郎左様か左近して若様御出でに相成れば、手前は主君をば取るところの役目にとさります、就さましては栗宮主水の舎弟右馬助を以て黄金の小玉にて只一發の許に主君を取らんといふ手配にとさります桃太郎、それも〱〱〱その時は斯様々に致せ、来る二十日を以て、予は島

松 桃 太 郎

田の屋敷へ懸越すといふ沙汰を致すから、その日は極めて晴天
なり、然るに正午より必らず黒雲出づる事あり、未申より雲出
づる時は雨降しと心得る。左近、ハ、ハ、桃太郎、陣に掛り、懸れば、
正炊の時の用に足らず、菅の笠を以て、口を圍ひ、その下に火
籠を巻いて、火の消ぬさるやうに致せど、汝、宮主水に傳へ、
何處までも敵方に油断をさせよ、計略の次第はこれ、召油
り方は云々、ナ、相分つたか、左近、ハ、ハ、驚き入つたる御計略
流石は豊田大先生の御門人にあらせられ、天文地理までに明る
さ御方と承りましたが、實に左近も恐れ入つたる事にとさうさ
す桃太郎、ハ、ハ、ハ、必らず怪呆ナ、左近、心得ました、桃太郎、急ぎ、左近
ハ、ハ、ハ、と言ひながら、黙禮をして、左近はその儘立去りました
背後見送つて、桃太郎、取、「彼れは眞の忠臣なり」と、獨言ひながら
山、御方に入つて、御殿みになりましたか、二十日の日は、正炊
百六十九

久松太郎

は自から島田の屋敷へ御出でに相成るといふ事か、悪人共に聞
けり参り、何れも島田の屋敷へ銘々股肱と頼みあるところの曲
者を差遣し、この手で行かすばこの手を以ち、假令汚名を世に
流すとも、此處にて桃太郎をば撃つて仕舞へば、先づ國許に於
て兎に角富山公を以て一ト度加州の當主と直すは必定、必らず
控呆さるやうに致せど、銘々支度をして相待ち居りませす。
く、二十日の未明には、かねて十一家の宗太郎方へ出て参つた
は、桃太郎殿よりの御せでございませすから、其處で宗太郎は今
日の御供の人々には、宗太我君は島田の屋敷へ御出でに相成るま
で、何事も應答は致されぬ、少と仔細あつて無言なりと仰せら
れました、お尋ねあるも御答へはないから、その御積りでお出
であれ、就きましては籠長持の用意をば云々に致されるやう
また豊島の発難を以てその長持を包むまでの用意をせよと、私

久松太郎

へ仰付けられました、供方の人々は中に品物も入れないので、
豊島発難で包むとは、可怪な事をされると思ひましたが、何
うも致方がございませせん、宗太就いてはその他供の儀も、今日は
加藤三郎左衛門殿一手五十人だけを以て供に召伴れ、藤原平馬
殿は此處に残つて、不在中を相守れとの御沙汰にござります、
且つ御不在中は、石野雅樂助殿が留守居を致される事にござり
ます、○イヤ委細承知仕つた、と供の人々は、それく、その
用意に及びました、然るに夜の晩方に石野雅樂助乗物で出て参
り、その儘桃太郎殿の御在でに相成る御居室へ横着けになりま
した、けれども誰れ一人も、我君の許される事なれば、横着け
にしないやうと、乗物のまゝ導入らうとも、それは名める者はござ
りません、そこで直に御立ちになるかと思へば、なか、急に
御出まじなく、何か雅樂助とお談合でもあるか、供廻りの人々

久松桃天耶

は不思議に思つて居りますうちに、再び榎木屋宗太殿御出で
宗太殿一圓、今日は油断は相成らぬに依つて、鏡々槍術に心得
のある者は、槍の用意を致し、仰しも被れ此れある時は、槍を
以て向ふ者を突留りるとも苦しからぬといふ御沙汰でござりま
す。どのとに、供方一同は「ハ、ア今日は餘程思召しあつての
御出でと見ゆる」と思ひました。宗太また午刻後よりは雨繼し
ゆゑ、雨具の用意を致し置けといふ仰せもござりました。その
お積りで、これを聞いて供廻りの者、〇この晴天に雨具の用意
をせよといふ仰せでござりましたか。宗太左様、〇「ハ、ウ」一圓
はます、不思議に思ひました。上からの仰せゆゑ、これを
用意を致しました。今や、と此方は相待ち居ります。か
が、桃太殿の御出でがござりませぬ。ハ、ア心得ぬと思ひ居り

久松桃天耶

ました。が、午刻後になつても御出でがない、果宮右馬助樂組の
御出で、黄金の小玉を込めたる鐵砲を持ち相待ち居ります。
この者は中々火術の達人でござります。被れ此れ致して居りま
す。るところへ、宮部左近は出て参り、左近右馬助殿、右馬助事
さい、左近今日は最う半刻ばかり経つと、未申の方より黒雲出で
必らず雨催しでござるから、菅の笠を用意を致して、腕口を袖
へ火繩の消ゆるさるやう用意を致されよ。右馬助、ハ、ハ、他愛も
ない事を言はつしやる新様な晴天に、左近イヤ拙者伊賀にありし
時、些か天文を學びし事もあるから疑はしやるナ。右馬左様か
と申して居ります。うちに、果してハ、ハ、と雨が降つて参
りました。右馬、これは恐れ入つた、なか、宮部はわらい者だ。
と一圓、心せぬ者はござりませぬ。ハ、ハ、と首ふので菅笠
を以てその変度を取して居ります。左近正面の御立の致には

久松桃太郎

島田辨之助... 門表門にかゝり... 折柄突銃の御越し... 待ち居ります... 活ります... 車軸を流す如く... 重政公が御出でに相成った... 門表門にかゝり... 折柄突銃の御越し... 待ち居ります... 活ります... 車軸を流す如く... 重政公が御出でに相成った... 門表門にかゝり... 折柄突銃の御越し... 待ち居ります... 活ります... 車軸を流す如く... 重政公が御出でに相成った...

頁七十回

久松桃太郎

島田辨之助... 門表門にかゝり... 折柄突銃の御越し... 待ち居ります... 活ります... 車軸を流す如く... 重政公が御出でに相成った... 門表門にかゝり... 折柄突銃の御越し... 待ち居ります... 活ります... 車軸を流す如く... 重政公が御出でに相成った... 門表門にかゝり... 折柄突銃の御越し... 待ち居ります... 活ります... 車軸を流す如く... 重政公が御出でに相成った...

頁七十五

久松桃太郎

「さうでもない、さてこの事なれた者は何人にとさいますや、大
回に委しく伺ひます。」

第九回

「この身代に立ちました者は如何なるものでございますか
は、此は桃太郎殿金澤へ御歸國になりました際、石野雅樂助と
いへる者、これはまたあるまじき御事を致し、領主筑前守殿の
危きを野田山にて御助け申した事ありと聞き、それは如何なる
趣意なるかと、密かに供をも伴はず一人、雅樂助の屋敷へ
られました、この雅樂助の屋敷は鬼川筋木村町といへる、
て、聞かぬでございまして、お食事は三千石を拜領いたして居
ります、夜中密かに桃太郎君の御出でになりましたとゆゑ、大

久松桃太郎

さは驚きました。極く鄭重に要應いたしました。桃太郎殿は
 兄重致殿を御助け申した次第を開き、且つ四方八方の話を致し
 て居りました。時に次の室より「御前、御酒は如何でござりま
 すか」と尋ねます。「ふ、替へて呉れ」と雅樂助は申しまし
 た。ハツと言ひながら、唐紙を開けて、恐る／＼銚子を取りに
 参りましたゆゑに、片傍の衝立の縁に、隠らすもその者の姿が
 映りました。そこで桃太郎殿は、不圖御自分も衝立の縁を御覽
 なさると、同じく我々が映りました。桃太郎雅樂、雅樂ハ、ツ桃太郎今
 のは何ぢや、雅樂彼れは手前手許近く使ひ居ります。小性の越谷
 吉三郎と申す者でござります。桃太郎左様か、幾歳ぢや、雅樂當年十
 七歳でござります。桃太郎、ウ、予に一ツ下ぢやのウ、雅樂ハ、ツ
 御意にござります。桃太郎如何ぢや、予の顔容と育て居りはせぬか
 雅樂、これは恐れ入ります。左様仰せのござりますと、手前も御

顔を拜し、彼れが面に比へますれば、如何にも何うも君によく
宵て居りますのでござります桃太世には宵た者もあるのや、予
の顔が二ツに映つたかと思ふた」と跡は笑ひでこの夜は御引取
りになりました、ところが這回の大事件に相成つて参りました
に付、かねて雅樂助に御相談になりましたところから、二十日
の日は吉三を以て身代に立てねばならぬとのとに、雅樂助は覺
悟を極めまして、十九日の夜に屋敷に戻り雅樂平内は居らぬか
平内へ、ツ、雅樂吉三郎は何處へか参つたか平内へ、ツ、今夜は
豫て御前にお願ひ申してあるから、笠前田圃の母が病氣ゆゑ、
ナマツと見舞に行きたいと申して参りました雅樂オ、左様か、
最う程なう戻るであらうのや平内御意にござります雅樂戻らば
奥室へ通して呉れ」とその儘雅樂助は居室へ引取りました、慥
て其夜の亥刻前越谷吉三郎は立歸つて参りました、依つて平内

より右の由を申しますると、吉三郎はお奥へ参つて唐紙外に手
を突き吉三御前、失禮を致しました、只今立歸りましたのでござ
ります雅樂オ、ツ、ヤ、ツ、此方へ通入れ……餘の儀ではないが
其方の母の事も、身は氣になつてならぬ、如何ぢや、少と好い
方に向いたか吉三お此蔭を以ちまして、先般戴きましたお藥に
て、餘程母も快い方に向きました、先般戴きましたお藥に
兵衛が現世に居るうちなれば好ければ、吉兵衛は疾くに亡く
なり、其方一人が便りの母ぢや、随分氣を付けて取らせよ吉三
有難う存じます、雅樂が、吉三、汝に此方は尋ぬる事があるが
吉三ハ、何事ぞござります雅樂、おは餘の儀でない、知つての
通り、先般北山の間違より、遂に此方は御家の好賊を見顯さん
と致し、それが爲めに夜中身が屋敷へ曲者が忍入り、我一命を
取らんとせし事があつたが、其方は知つて居るであらう、幸ひ